

「ライフスタイル・ワークスタイルの変化と

新しいまちづくりシンポジウム」

報告書

日 時：令和元年5月11日 午後2時00分から午後5時00分まで

場 所：松戸市民劇場ホール

主 催：松戸市

参加数：211名

プログラム

○開会挨拶

○基調講演

テーマ：ライフスタイル・ワークスタイルの変化と新しいまちづくり

講 師：横張 真 (よこはり まこと) 様

〈東京大学大学院 教授／松戸駅周辺まちづくり委員会 委員長〉

○松戸市説明

テーマ：新しいライフスタイル・ワークスタイルを支える行政の役割

1. 新拠点ゾーンをランドマークに (新拠点整備課長)
2. これからの市役所のあり方 (財産活用課長)

○パネルディスカッション

コーディネーター：横張 真(よこはり まこと) 様

パネリスト：西村 幸夫(にしむら ゆきお) 様 <神戸芸術工科大学 教授>

宮城 俊作(みやぎ しゅんさく) 様 <東京大学大学院 教授>

秋田 典子(あきた のりこ) 様 <千葉大学大学院 准教授>

総合政策部長挨拶



●総合政策部長(石井)

本日は、本シンポジウムにご来場いただきまして誠にありがとうございます。

松戸市 総合政策部長の石井でございます。

本来であれば、松戸市長である本郷谷 健次よりご挨拶をあげるところではございますが、心苦しくも、本日は所用により出席が叶えませんでした。

つきましては市長よりメッセージを預かって参りましたので、私の方から代読させていただきます。

「本日はライフスタイル・ワークスタイルの変化と新しい街づくりシンポジウム」にお越しいただきまして誠にありがとうございます。日ごろより皆さま方には本市の街づくりの推進に対し、大変なお力添えを賜っておりますことをこの場をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。

本市は都心から20km圏内。時間にして約30分程度の場所に位置し、高度経済成長期において急速に人口が増加し、都市的な利便性とゆとりある生活環境を兼ね備えつつ発展して参りました。しかし、近年においては、都市基盤が更新時期を向かえ近隣都市における都市開発の影響もあり、商業・業務面などを中心に活力が失われつつあります。

今後も急速な少子高齢化が進んでいく中、街を再生し賑わいのある街づくりを行うためには、20年30年先を見据えた街づくりを推進していく必要があります。とりわけ都内からの玄関口である本市の顔とも言える、松戸駅周辺街づくりに特に重要になると思います。

本市のポテンシャルである都市的な利便性と、ゆとりある生活環境をさらに発展させるべく、将来に向けて多様に変化するワークスタイルやライフスタイルを受け止め、市民や訪れる方のニーズに答え、選ばれる街づくりを進めるため、松戸駅近傍に残された唯一の大規模な街づくり用地である新拠点ゾーンをいかに活かしていくか。

また、現在の市役所につきましても、耐震性や老朽化の問題もありますことから市民生

活の安全性を考える上において広く市民の皆さまと方向性を共有し、市民の皆さまと検討を進めて参りたいと思います。本日のシンポジウムが、有意義なものになりそして今後の松戸市周辺の街づくりに対する一助となることを祈念いたしまして、ご挨拶をさせていただきます。令和元年5月11日 松戸市長 本郷谷 健次 代読でございます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

基調講演

講師



横張 真

松戸駅周辺まちづくり委員会 委員長

都市やその郊外の緑地環境計画・ランドスケープ計画を専門として都市農業、縮退時代の都市緑地計画、アジアの都市地域のサステナビリティ等の研究を行っている。

【経歴】

東京都向島生まれ

東京大学大学院修了 博士（農学）

東京大学大学院工学系研究科教授

筑波大学大学院システム情報工学研究科教授、

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授を経て現職

京都大学、早稲田大学の非常勤講師、グルエフ大学（カナダ）、

パトリ大学（イタリア）、アデレード大学（オーストラリア）等の客員教授を兼任

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。



●横張 真 様

はい。かしこまりました。ご紹介にあずかりました横張でございます。本日は、大変暑い中お集まりいただきましてありがとうございます。

個人的なもので恐縮ではございますが、昨日までドイツに出張に行っておりまして、夕方成田に着いたのですが、むあっとした暑さですね。

日本に帰ってきたという実感をしているところでございます。

本日は、30分ほどの時間と伺っておりますので、先を急ぐようで恐縮でございますが、早速本題に入らせていただきたいと思います。

いきなりではございますが、私はかつて松戸の市民でございました。

今から3、40年前でございますが、高校を卒業した後に、親に連れられまして松戸に引っ越して参りまして大学院を卒業するまでの、ほぼ10年くらいでしょうか、松戸の地に住んでおりました。

何処に住んでいたかと言いますと、ここでございまして、矢切の1番端この三矢小台に住んでおりました。当時、大学へ通う際には、このように自転車等でその駅まで行き、千代田線を通っておりました。

学生時代は、サッカーをしておりまして、家の近くでジョギングというと、この近くをウロウロとして走ってくると。そういうことをしていた人間でございます。

実は、まだ母が健在でございまして、松戸で引き続きお世話になっているのですが、正月には、矢切神社での初詣など色々な意味で矢切を含めまして、松戸にはお世話になったものでございます。

さて、当時とあまり大きく街の様子が変わっているようには、見受けられないのですが、1つやはり大きく変わった点がございまして、それは何かと言いますと、やはり全体に高齢化が進んでいるというのが非常に印象的でございます。

別に、松戸に限ったわけでございませんが、これは、日本全体の人口推移を示してございますけれども、この人口ピラミッド2000年の時のものでございます。これが2000年以降どのように推移してきたか。そしてまたどのように推移していくかと言いますと、ご覧いただけますでしょうか。

2050年も、あと30年ほどでございますけれども、ご覧のとおり完全な逆三角形となると。高齢者が大多数をしめるということになって参ります。また、こうした高齢化につきましても、従来は過疎地の問題であると。あまり大都市には関係ないとされてきましたが、今後の高齢化というのは大都市の郊外部に多い。特に、急速に進行するということが言われております。

2010年を基準年といたしまして、2025年あと5年ほどでございますが、高齢者人口の割合がどれくらい増えるかということの色分けしたものでございます。例えば、松戸市はと言いますと、ご覧のとおりですね140~160%。すなわち2010年から比べますと高齢者人口が大体1.5倍くらいになると言われています。

松戸も含めまして、今後急速に高齢化が進んでいくとされる自治体が、ざっと首都圏の大体20kmから50kmの間ぐらいなので、郊外開発が急速に進んだ自治体で展望されているわけでございます。

では、松戸ないし千葉県はどうかといいますと、これが1990年から2010年の間の高齢者の人口比率の推移を示したグラフでございます。周辺の流山や柏、市川と比較しますと、2010年頃は、相対的に松戸の高齢者比率が低かったんです。ところが、現在は松戸が1位になっており、千葉県全体としては、松戸が平均並みになっている。更に、平均を超えるような高齢者率になっていくということが分かるかと思います。

そして、こうした高齢化が進むと当然人口の減少も起きるわけですが、全国的な数字を見ると、ご存じのとおり2005年ぐらいが総人口のピークであったと言われております。既に日本の人口は減少期に入っており、色々な推計がございますが、人口が減少していくことは間違いないとなっておりますね。

人口の減少につきましても、従来首都圏はあまり関係ないと言われておりました。特に東京を中心として、他自治体はどんどん人口は減少するが、東京は大丈夫だと言われておりましたが、現在は、東京でも人口は減少していくのではとも言われております。

これは2015年から2040年の東京の人口増減率の予測値でございますけれども、東京といえども、増加すると言われていた地区は、わずか10程度でございます。区部にあっても13区はマイナスに転じ、市部にいきますと増加というのは、本当に僅かしかなく、ほとんどは減少に転じます。

では、千葉や松戸はどうかといいますと同じことでございます。

上が千葉県全体、下が松戸でございますけれども、ご覧のとおり松戸も千葉も今後は人口減少していくのはもう避けられないというのが予測されていることであります。

このように首都圏全体としましても千葉県としましても、高齢化であり人口減少ということは避けられないという中で、当然のことながら各自治体は、いかに少しでも多くの人に来てもらえるか、特に若い人に来てもらえるか。こういった辺りを、政策の中心にしているわけです。では、松戸が相対的に選ばれる街になるには、どうしたらいいのだろうか、次に考えてみる必要があると思うんですね。

その際に、色々な形で不動産屋さんとかが様々な統計を出しておりますけれども、そういった中の一つに、住みたい街ランキングというのがいくつかございます。これは、そうした中の一つでございまして、借りて住みたい街のランキングというものです。いわゆる持ち家でなく、賃貸等でアパート等を借りて住みたい。「あなたは何処に住みたいですか」という調査に対して上位にあがってきた街をここに記してございます。

賃貸ということもありますが、ご覧のとおり、都心の特に中央線沿線です。中野や高円寺、吉祥寺辺りを中心にして人気の高い街が広がっているというのが、お分かりいただけるかと。

次は、買って住みたいランキングとなります。買うとなりますと、もう少し現実的になりますので、あまり都心に買うにしても財布の中身として難しいという事もございます。そうなりますと、ご覧のとおり各自治体が買って住みたいランキングの中に出て参ります。比較的この近くですと、流山のおおたかの森や柏、おそらく柏の葉と思うのですが、

この辺りが非常に人気であるということが、お分かりいただけるかと。

次に、穴場ランキングというのもありまして、意外に穴場じゃないかという自治体は、このような所がございます。なぜか、京浜東北線沿いが多いんですね。赤羽や田端、川口、大宮とこの辺りが結構穴場であると言われているみたいでございまして、お近くでございますと、柏や茨城ですが守谷とかですね。この辺りが拳がってくるんですね。

さて、今見ていただいた所に、松戸は無いじゃないかと。松戸はどうしたんだと。思われるかと思うのですが、実は松戸が出てくるのは、住みたくない方なんですね。

しかも7位ということでございまして、大変の不名誉な形になっているんですけども、こうしたその今名前が上がっている自治体とともに住みたくないという中に出てきてしまっているわけであります。



では何故、松戸は不人気なのだろうかということですが、先ほど見ていただいた住みたくない街ランキングの中に、何故住みたくないのかということがアンケートの結果として列記されているのですが、松戸のところを見ますと、ご覧のとおりでございます。

駅周辺の繁華街にどうしてもない下品な雑居ビルがひしめき合っている、ですとか。これは、私が言っているわけではありませので、書いてあることをそのとおりに転記しただけなんですけど、あとは、ぼったくり店が多いとかですね。ラーメン屋以外にこれといった店がない、暴走族がうるさいとかですね、けんもほろろに示されているんですね。

これだけ見ると「大変調子が悪いな」となりますけれども、逆にいうと、こうした点を今後改めていくことができれば、特に駅を中心としているエリアにおいて、松戸の評判の悪い点を、なんとか克服していくことができれば、伸びしろは大きいと考えていいのではないかなと思うんですね。

先ほどのご挨拶の中にもございましたけれども、首都圏から 15km から 20km ぐらいの距離圏に入っています。大変に通勤では便利な場所にあるわけですね。それから周りには、

江戸川を中心とした緑のエリアが広がっている、更にその後背地には、梨畑や道路畑も広がっているということで、ポテンシャルがあるとすれば、それをどう引き出していきながら、まずい点を改善していくのが、ここにひとつのヒントとしてあるのではないかなと思うんですね。

では、どのような街づくりがこれから望まれるのだろうか。ということ、次に見ていきたいと思います。さて、その少し歴史を振り返って参ります。

昭和の時代ですね、特に戦後でございますけれども、50年代以降の高度経済成長の中で、次々と郊外地にニュータウンが作られる、団地が作られるという時代がございました。松戸も当然の事ながら、常盤平を中心として次々と首都圏にやってくる方々の受け皿としての住宅開発というのが進んだわけです。当時は賃貸が中心であったと思うんですね。

それとともに、駅前の開発等も進行していき、それが平成の時代になって参りますと、賃貸よりは分譲を前提としたマンション等の建設が進み、一方都心等では再開発・都心回避といった現象もあり、更に商業施設としては大規模なショッピングモールが次々に建設される。こういった時代があったかと思うんですね。

現在は、こうした所が非常に人気であるということ。先ほどの住みたい街の中で、こうしたような開発がここ10年ぐらいのうちに急速に進んだ所が、非常に人気になっているのではないかと思います。しかし、時代は令和なわけございまして、こういった街づくりがこうしたこれからの時代の中で必要とされるのか、そこを少し考えてみたいと思います。

模式的なことを申しますとこのひし形、なんだとっていただいてもいいのですが。とにかくこれまでの開発モデルというのは、そのものがあつた時に、それを要素や機能に分解して考えてみようと、この分解されたものを、将来を見越して少し大きくしてあげよう。こういう発想だったと思うんですね。そして全体が大きくなるから、それにしたがって、このサイクルを繰り返していく。という中であつて開発が進む、ということが基本的な発想になっていたと思うんですね。必要なものをリストアップし、リストアップしたものの中において、将来不足するとまずいから、少し多めに積んでおいて、足し合わせて次に。というような事を考えるというのが従来の開発モデルだと思うんですね。

抽象的で分かりにくいとすれば、例えば1つの家を考えていただいてもいいと思うんですけども、ベッドルームが必要だ、リビングルームが必要だ、ダイニングルームが必要だ。こういったものをそれぞれ切り分けて、寝る場所、集う場所、食事をする場所、かつ将来的に家族が増えるかも知れない。という中で、現在必要な量よりは、少し多めに積んでおいて、そして家を買う。ということがこれまで一般的であつたと思うんですね。

しかし、今の時代の若い方々を見ますと、大分発想が変わってきているんじゃないかと思ひます。というのも、よくご存知だと思ひますけれども「断捨離」という言葉がござひます。日本だけでなく、世界的にこうした断捨離が大きなブームになっていると言われております。とにかく可能な限りものは持たないんだと。そして少しものが増えてしまつたら、本当に必要なものは何か見極めて、後はもう捨ててしまう。そういう身軽さとい

ったらいいでしょうか。それが非常に求められる。そうした時代になってきている。

あるいは、ものではなくて、むしろ「事」にこそ重要性を見出そう。こういう時代になってきているのではないか。と思うんですね。

そうした流れとおそらく同じと思うんですが、もう 1 つ最近の若い人を見ていると、キーワードとなるのが「シェア」ということですね。「シェアリング」ですね。

これは、あるホームページからダウンロードしてきたものですが「シェアリング」には、大きく分けると5つに分類できます。といったことがここに示されております。これらいずれも、個人個人が必要なものを全部所有するのではなく、できる限り他人や他の組織等と「シェア」をすると「共有する」ということを前提に考えていこうと。

これが今の若い方を中心に、これからの時代の空気になろうとしていることだと思うんですね。そうなって参りますと、先程の話しに戻りますけれども、このある事柄について要素や機能に分解しましょうと、ここまでは一緒だと思いますが、どうもここから先が今までとは大分発想が違うのではないか。すなわち断捨離ということから言えば、大きくするのではなく、なるべく無駄を省いて小さくすると発想しよう。それからまたシェアということ的前提にしますと、なるべくそうした小さくしたものを組み合わせていって、その組み合わせの中から無駄な部分を省いちゃおうと。こういうサイクルが繰り返されていくように、なっていくのがかっこいい暮らし方だと、今、大きく変わってきていると思うんですね。

それが先ほどの住宅の例えで言いますと、実は温故知新であって、元々の日本の住宅ってそういうものだったですよ。例えば「サザエさん」の居間、ちゃぶ台がある居間なんかまさに、そうでございますけれど、1つの空間が食事の場でもあるし、団らんの場でもあるし、最後には布団を敷いてそこに寝ると。

あるいは逆に少し大きな家ですと、お客様を呼ぶ時には、襖を取っ払い1つの大きな居間にするし、そうではなく普段の場合にはそこに襖を立てて切り分けて、それぞれの空間を作るといった、こういう空間を上手く使い分け、その時その時によって使い分けながら、できる限り余計なものを作らない、持たないといった、暮らしのありようが、これからの暮らしの大きなヒントになると思うんですね。それから、こういった暮らしが根付いて参りますと、物を買うという行動も従来とは大分変わってくるのではないかと思うんですね。

そもそも買わないというのが、まずは第一でございますし、それと共に買う場についても、最近はこうしたライフスタイルショップというお店が増えておりますけれども、従来であれば本を買うのであれば本屋さん、医療関係を買うのであれば医療用品店といった具合に切り分けられていたものが、あるライフスタイルに従って、それが寄せ集められて1つの店舗になると。個々の品を見ると決してそんなに品数があるわけではないのですが、それが、あるライフスタイルという中に統一的にその店に集まっていて、それが非常におしゃれであると。そして、そういう所でこそ買うんだとしたら、そういう所で買うというように時代が大きく変わってきている。

あるいは、某本屋さんですけれども、最近の本屋といいながら、本をほとんど売らない。本屋の中にカフェもあれば、色々な食材等を売っているお店があり、そして、本に囲まれた知的な空間にいて、そこで時を過ごしたり、場合によって何か物が必要であれば、ちょっと買うというような、そういう店舗形態というのが今、どんどん主流になり始めている。という具合に、暮らしの在り方、あるいは物の買い方が今、大きく変わり始めてきている。それから更に、仕事の在り方も大きく変わってきていると思うんですね。

実は私の知り合いの、某、上に書いてありますね、大手のデベロッパーですけれども、ちょうど1年ほど前に本社の社屋を移転しました。その時に、新社屋に移転する際に床面積を3割程減らしました。この大きな会社が床面積を3割減らすというのは大変なことですけれども、ガクッと床面積を減らしまして、その代り、ご覧のようなオフィスの配置にしてみました。これは決して遊んでいるわけではございませんで、ここでみなさん業務をしており、いわゆるフリーアドレス、会社にやってきたらどこの席についても構わない、自分の定位置があるわけではないんですね。



それからフレックスタイム、いつ出社しても構わない。それからそもそも、出社しなくてもいい、いわゆるテレワーク、すなわち自分のコンピューター1つで、どこで仕事をして構わない。それから1番最後、これはまだ、この大手のデベロッパーさんは導入されていらないのですが、こんな時代になって参りますと副業がまたOKに、今なっているんですね。副業といわれるとピンとくる方もおられるかもしれませんが、4月の18日でしょうか、朝、テレビを見ておりましたら、「おはよう日本」で、「小商い」というキーワードの中でもって、まさにこの松戸の地で、都心のIT企業に勤めながら、一方で副業として靴屋さんをやっているという女性の物語が紹介されておりましたが、どうも昨日の夜もN

HKで再放送されていたようですが、まさに松戸の地で、こうしたような仕事についている方がいらっしゃる。そして、これがこれからの大きなトレンドになろうとしていると。そういう紹介のされ方でNHKでも紹介されておりましたが、このように大きく仕事のあり方も従来とは大分色合いの違うものになり始めているという事だと思っんですね。

こうなって参りますと、今申しました、フレックスタイムであったり、テレワークであったり、さらには、副業もOKですとなって参りますと、当然、暮らしながら働くための施設、器に対する要求というのが変わってくるんだと思っんですね。つまり、毎日決まった時間に会社に出社するわけではございませんので、毎日自宅に居て、自宅に居ながら仕事をしていると。

そうなりますと、従来は住む、あるいは寝に帰るだけの場所であったものが、役割、機能というものが、大分様変わりしてくるということになるのではないかと。さらに、そうした器として例えば、「しゃれたカフェがあっていいよね」とか、「図書館で仕事できるもいいよね」とか、こういったこともさることながら、さらには身の回りの環境全体に対する要求というものも随分とまた、様変わりしてくるのではないかと思います。

私の専門分野になりますと、例えば緑について考えてみますと、従来は緑といえばイコール公園でありました。小さなお子さんがいらっしゃるようであれば、子供の手を引いて、たまの休みの日に子どもを遊ばせに、あるいは、日向ぼっこに行ってくると。そういう場があることがすなわち、緑が身近にあるということであったわけですが、日常的にそうした場に暮らしている、そこで仕事をしているということになりますと、これだけでいいのかということになってくるのではないかと思います。例えば、最近、世界中でそうですが、こうした農園というものが非常に大きな流行になっています。

昨日まで行っておりました、ドイツでもそうでございますし、アメリカでもそうですし、イギリスでもそうですし。世界の様々な大都市にあって、今こうした、自分でその畑、市民農園みたいなところを耕して自分で食べる野菜なんかを作っちゃう。こんなことが流行りになってきちゃっているわけですが、もしかするとこういったようなタイプの緑も欲しいというような、そういう要求が出てくるかも知れませんね。

それからまた、もうひとつの最近の流れとしましては、先ほどの「シェア」も含めてですけれども、なるべく持続的な社会をつくっていかうじゃないか。下にございますのがこれ、「SDGs」といまして、国連が今定めている持続的な開発目標というもので、17個の目標が掲げられていて、世界の国々がこれからは開発を行っていく際には「できるだけやり方を持続的な開発にするんだ」ということで、こういう目標を国連も掲げているんですけれども、そういうような世界的な動きをこうした街づくりの中にも、どうやって活かしていくのかという時に、なるべくその物を地域内で回していく、こんなことも問われるようになってきていると思っんですね。

要するに何でもかんでも安ければ良いということで、海外から輸入してしまうとかではなくて、なるべく地場にあるものを活かしながら街をつくっていかう。これもこれからの大

きな目標になっていくのではないか。そうすると先ほどの緑の話しを巡ってはですね、実は、そういうことに既に取り組み始めた自治体がございます、国分寺市です。

東京都の国分寺市ですが、「こくベジ」という名前で、何をやっているかといいますと国分寺市は、実は非常にまだまだ農地が多く残っておりまして、ご覧のとおり東京都内では農地面積が2番目に多いんですけれども、割合として多いということを自慢しているんですけれども、まさに松戸と同じようにですね、こうした住宅と混在する形でもって農地が残っているそういう自治体なんですね。

こういう自治体にあって、今、何やっているかといいますと、この国分寺で生産された様々な農作物をできる限り国分寺の市内で消費する。というシステムを作ってきている。ということなんですね。例えばこうした「こくベジ」の配達ってしていますけれどもこれ、つまり生産者の農家さんからですねその生産された農作物を集め、それを消費されるレストランであってみたい、あるいは販売店であってみたいに届けるようなそういうそのデリバリーのシステムですね。そういったものを整備し、一方で国分寺市内に、すでに80店舗あるそうなんですけど、この「こくベジ」に加盟していただいた飲食店ですね、こうしたところで、その生産された作物を消費してもらおうと、食べてもらおうと。更に「こうした仕組みが国分寺にはあるんですよ」ということを今度は、広く、様々な形でもってPRしていく。

あるいは、他の業態の人といろんなコラボをしてですね、無印用品とか国分寺は日立製作所の中央研究所があるんですけれども、そことタイアップしたり、というようなことを色々と取り組んでいる中で、国分寺で生産された農作物を国分寺で消費してもらおう、こんなことをやっている所なんですね。これはつまり、その配達とか、あるいは消費を通じて農作物をローカルに生産・消費するという、それから一方ではそれをPRして、その結果として農業だけでなく飲食業とか観光業も活性化し、それが地域ブランドのイメージの向上に繋がる、こういうことが起きているということですね。

これは本当のことなんですけれども、私のところの秘書さんが研究室にいるんですけれども、そのお友達の方が最近、国分寺市に引っ越されまして、何でかって言ったらこの「こくベジ」があるから。」というので引っ越されたという話をされておりましたけれども、まさにこういう話しをされておりましたけれども。

ということであるとすれば、この松戸の農地ですね、この矢切耕地を含めた、こうした場所をですね、今申し上げたシステムの中に組み込んでいくという事も決して夢物語ではないんだと思います。



また、パネルディスカッションですね、今日、パネリストの西村先生にもぜひ色々コメントいただこうと思っているのですが、一方では旧街道沿いを中心とした様々な歴史的な遺産などもまだまだ残っている所があるとすれば、これもどう上手く活用するのか、こんなところも1つの課題となっていくのではないかと、思います。

もう時間になってしまいましたので、最後は駆け足になってしまいますが、皆さん〔ヒューゲン〕という言葉が聞かれたことはございますでしょうか。デンマーク語で気持ちいい、心地いい暮らしといったような言葉です。英語で言うと〔アメニティ〕に近いようなことだと思えます。その〔ヒューゲン〕という言葉がございます。言うまでもないですが、デンマークは北欧の1つの国として、日本でも例えば、福祉国家であるとか様々な意味で非常に有名でございますが、私、数年前に、コペンハーゲン大学という大学がありまして、そこに1、2ヶ月ほど集中講義に来てくれということで、向こうに2ヶ月程住んでいたことがございます。

これが私の行っていた大学の校舎でして、この右側の建物がゲストの研究者等が泊まるアパートでございまして、中に入るとかっこいいんですね。こんな部屋がありまして、1人じゃとてもじゃないけど、使い切れないようなスペースと、こんなにかっこいい家具に囲まれました。1人で行っておりますと夜暇な時に、友人等を招きまして、私は料理も趣味でございまして、こんな料理を作って友人をもてなしたりしておりました。

あるいは、コペンハーゲンは自転車が大変有名でございまして、私もこんな形で、自転車でこのような道を通勤しておりました。ちょっと郊外に行きますと、ルイジアナ美術館という現代美術の美術館がございまして、非常にかっこいい美術館でございまして、現代美術館というとなかなか敷居が高いような気もいたしますが、そんなことは全くなくて、

周りのランドスケープを取り込みながら非常におしゃれな設えになっている所であったり、こういうデンマーク、素材を活かした温かみのある北欧デザインということで非常に有名だと思うんですね。

ですが、実はデンマークは何の資源も無い国なんですね。面積も日本の10分の1くらいしかございませんし、人口にしては日本の20分の1以下、特に地下資源があるわけでもございません。

典型的な農業国でございます、かつ北欧ですので、長く暗い冬が続く。そういう国ですけれども、そういう国にあってデンマークという国は結局のところ、使える資源は片っ端から使い尽くすんだと。それから、物は決して無いけれども、豊かではないけれども楽しく暮らす知恵を絞ろうではないかと。そういう形でできてきた国であろうかと思うんですね。

その象徴がこの2つです。1つはレゴブロック、もう1つはB&Oというカッコいいオーディオ等を作っているメーカーです。実はこの2つ、ご覧のとおりどちらも本社はコペンハーゲンではない。特にレゴはビルンという町ですけれども、コペンハーゲンから車で2、3時間かかる、しかも人口6000人くらいしかいない、日本でいえば村ですね、という町に本社がおかれている。

これはなぜかという、色々話は長いんですけど、一口で言うと、とにかく、全国土を見渡して使える資源はとことん使い尽くすという中で、様々な産業がコペンハーゲンだけじゃないところに立地しているということが、デンマークの特徴であると思います。

ちょっと予定時間を超過してしまいましたが、暮らし方もそしてまた、働き方もこれから、大きく変わろうとしている。そういう中であっては、従来はとにかく、拡大することを基調として動いてきた社会が、そうではなくて、これからはむしろ無駄を省く、ないしは地の資源を活かしていくという中で、いかに効率的に、空間にしても社会にしても作っていくのかという時代になってきている。

そういう中であっては、緑であったとしても従来とは大分違ったタイプの緑が求められるかもしれないし、そしてまた一方では文化資源等も活かしていくことになるでしょうし、更にはそこに芸術的な資源等を作っていく場合にも上手く地の物を活かしていく。というような生き方、これが必要になってくるのではないかと考えています。ですので、これからの松戸の街づくりを考えていく上でも、こういったあたりがヒントになるのではないのでしょうか。

決して従来のような、高い高層マンションを建てちゃえ、大きなショッピングモールを作っちゃえという中で、なんとなくそれでいい街ができるという夢は、もうそろそろ捨てないと、それが完成する頃には、それを本当だったら住むべき人たち、使うべき人たちから、「こんなのダサいよ、カッコわるいよ。」と言われてしまうのではないかなと思う次第であります。ちょっと時間を超過いたしましたので、以上を私の話題とさせていただきます。

どうも、ご清聴ありがとうございました。

(拍手)



松戸市説明（新拠点をランドマークに）



●新拠点整備課長(渡辺)

本日は、お忙しい中、本シンポジウムにご参加いただきまして誠にありがとうございます。新拠点整備課長の渡辺でございます。よろしくお願いいたします。

ただいま横張先生の基調講演でもお話がありましたように、今の時代の流れはますます速くなり、私たちの人生の大部分を占める「働く」というあり方も、人生そのものともい

える〔暮らし〕のスタイルも、大きく変わろうとしております。

時はまさに〔平成〕から〔令和〕への改元により、新しい時代がスタートいたしました。皆さまの中にもいらっしゃるかも知れませんが、私は、〔平成〕ですら新しいと思えてしまうところでございますが、時代は容赦なく進み、これから益々その流れが速くなるように想像できるところでございます。

このような時代の変わり目にあり、松戸も新しい時代の流れに竿を差して、大きく変わっていく必要があるのではないのでしょうか。しかし、ただ単に新しいものに飛びついて、新しく開発する、新しいものを創る、新しい空間を造るというように、一新すればよいというわけではございません。松戸が育んだ歴史・文化や、松戸に住む人々、松戸に暮らす人々、松戸に訪れる人々が、〔松戸〕という街に魅力を感じ、この先もずっと松戸で暮らしたい、また松戸に訪れたいと、今後も思っていただけのような、〔変わりゆくそのプロセスも含めた、変わり方〕をして行かなければならないと考えております。なぜならば、それこそが、将来を見据えたまちづくりではないかと思うからです。このような観点から、本日はお話しさせていただきます。

松戸の歴史をさかのぼりますと、平安時代の更級日記に〔まつさと〕と書かれているのが松戸であろうと言われておまして、〔太日川（現在の江戸川）の津（船渡し場）があったことから、〔馬津（うまつ）〕とか〔馬津郷（うまつさと）〕などと呼ばれるようになり、それが転じて〔まつさと〕という名前で呼ばれるようになり、これが松戸の名前の由来ではないかと言われております。

江戸時代には、江戸に近い等の立地条件に恵まれたことから、〔松戸宿〕と呼ばれる宿場町として、江戸川を利用した舟運の発達で河岸が設置され、周辺の流通・経済の中心地として発展して参りました。

その後、明治時代に入りますと水戸街道沿いに市街地が形成され、東葛飾郡役場も置かれ、東葛飾地域の政治の中心的な役割を担うとともに、商業の街として栄えて参りました。このころの中心市街地は、現在の松戸駅周辺よりも少し南寄りの、旧伊勢丹、現在のキテミテマツドの周辺でした。現在でも歴史的な街並みが残っており、そういう松戸が育んだ歴史的文化は、現在の松戸にも脈々と流れ、それが松戸の魅力の一つにもなっており、市民の方から「松戸宿の歴史や文化を大切にしたまちづくりをしてください」との声も届いているところです。

松戸駅周辺の変化(平安)

- ・ 更級日記に「まつさと(現在の松戸市)」として登場
- ・ 太日川(現在の江戸川)の津(船渡し場)があることから
「馬津(うまつ)」や「馬津郷(うまつさと)」と呼ばれる



松戸の由来の一つとして
それが転じ「まつさと」と呼ばれるようになる

松戸駅周辺の変化(江戸)

江戸川を利用した舟運により流通や経済の中心として発展



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

3

松戸駅周辺の変化(明治)

東葛区域の政治の中心を担い、商業の街として発展



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

4

現在の松戸駅は、昭和46年に完成し、その後、高度経済成長期の波に乗って、東京の衛星都市として急速な発展をとげ、人口増加にあわせて、公共施設や文化施設を含む、様々な都市機能が構築され、東葛飾地域の政治や商業の賑わいを牽引する中心的な役割を果たしていき、それが現在の松戸駅周辺の姿となっております。

時代は変わり、高度経済成長期から転じることとなり、人口減少社会、高齢化社会への波は着々と全国規模で押し寄せております。しかし、現在の松戸市は、子育て支援などの施策に取り組んでいることもあり、人口は、いまだ微増を続け、生産年齢人口も市・市街地においては微減から微増へと転じるなど、いまのところはわずかに成長を続けているところでございます。

松戸駅周辺の変化(大正～昭和)

「高度成長期」



東京の衛星都市として
急速な発展と都市機能の構築

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

5

近隣市の変化(柏市)



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

6

一方で、近年においては街の古さも目立つようになり、近隣都市である柏市や流山市が、つくばエクスプレスの新駅設置を契機に新しいまちづくりによる大型商業施設の出店が進むなど活気が増してきており、その追い風に乗って、柏駅周辺では再開発や地域でのまちづくりの機運が高まっていることなどと比較いたしますと、松戸駅周辺は活気が薄れつつあると言われることも多くなり、こうした状況から、「松戸は、柏や流山に比べて活気がない」とか「松戸駅周辺は、おしゃれじゃない」「松戸は、もっとどうにかならないか」など、市民の皆さまからも多くの心配の声が寄せられているところです。

このように、上昇気流がやんだ現在でも、何とか下降せずに踏みとどまっている、あるいは踏みとどまりたい松戸駅周辺ではありますが、そんな中で、市民や民間団体による新しい芽が生まれてきていることも、注目されております。

注目される「新しい芽」や「新しい風」



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

7

古くなったビルや空き家などを、逆に利用して松戸の歴史を想わせる施設に転用し、クリエイティブな人々を誘致し、地域の『人』を主人公とした民間のまちづくりを推進する団体や、アーティスト・イン・レジデンスを運営して、海外からアーティストを短期・長期で受け入れ、一宿一芸として、松戸駅周辺でアート活動等をしていただく団体など、新しい風が現在の松戸に吹いてきていることも事実です。

こういう風に乗って、先程の横張先生からもご紹介のありましたとおり、リノベーションによりクリエイティブな方たちが集まるマンションの一室を住居兼オフィスにして、昼間は東京のIT企業に勤めながら、夜や休日に「小商い（こあきない）」と称するような靴の職人として、コミュニティの中でお互いを助け合いながら夢をかなえていくという、自分自身の「価値」「夢」のために「（食べるために）企業で働きながら、（夢として）自宅で働く」という、未来の働き方の一つの事例として、松戸駅周辺を働くための住まい、つまりワーク・ライフ・シティとして選んでいただいているといったところが、NHKの「おはよう日本」という番組で紹介され、この番組が好評だったことから、昨晚も「首都圏情報ネタドリ」という番組で再放送されておりました。

何故、こういった新しい動きが、今、「松戸」で起こっているのでしょうか。



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

8

それは、1つには「田舎過ぎず、都会でもない」「交通の便が良く、都心に行こうと思えばすぐに行ける」「いい意味で、地域のコミュニティが残されている」「都会的でありながら、歴史・文化を感じさせる」という、都心に近いという立地的な魅力、そして都心にはない地域的コミュニティが存在するという魅力、更に歴史・文化的に育まれた魅力が、松

戸には大いにあるということではないでしょうか。

こうしたポテンシャルを持つにも関わらず、松戸市は近隣市と比べて活力が薄れてきていると言われるのは、何故でしょうか。

活力が薄れてきていると言われる理由



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

9

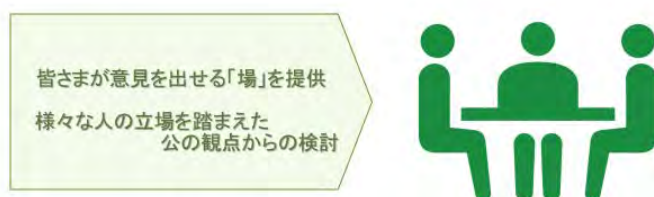
それは、行政と市民・地域の人々・民間団体とが、同じ方向を向いて進めていないというのが、1つの理由であるかもしれません。この原因の多くは、おそらくは行政にあるのかもしれません。何故ならば、時代に乗って大きく飛躍している街は、市民・地域の人々・民間団体が主体となって、新しいまちづくりを進めている事例が多いからです。

柏駅周辺も、そのような民間中心での構想を立ち上げていると聞き及んでおります。そういうまちづくりを進めている行政は、受け皿をつくり、手助けをし、支える役割を果たしていると思います。つまり、本気で松戸をどうにかしたければ、まず行政が変わる。これが必要ではないかということです。行政主導のまちづくりでは、地域のコミュニティを生かすこともできず、クリエイティブな民間のアイデアも生かせません。

行政は行政にしかできないことを、しっかりと行うべきであると考えております。

では、行政にしかできないこととは、何でしょうか。

行政の役割



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

10

それは、まずは、皆さんが未来に対する夢を持てるような松戸のポテンシャルを最大限発揮した〔松戸ブランド〕を創り上げるために、皆さんが意見を出せる〔場〕を提供し、皆さんの意思決定を行政として知見を踏まえてサポートする事、意思決定した事を実行に移す事であると考えております。

それに加えるとしたならば、市民の皆さまが多岐にわたるご意見をすべて取り入れるこ

とは現実的には難しいでしょうから、松戸にとって、松戸を訪れる人にとって、松戸に暮らす人々にとってという、様々な人の立場を踏まえた公の観点からの検討への参画や、行政だからこそ得られる情報の提供なども挙げられるのではないのでしょうか。

市民に情報を提供しながら行政が意思決定していくという今までの〔情報提供型の市民参加〕ではなく、これまでに述べさせていただいたような、市民が市と共に考え、意思決定していくというような〔意思決定主導型市民参加〕の歩みの始まりが、本日のシンポジウムであると捉えております。

そして、これから、〔どのような松戸にしようか〕ということについて、皆さまが主体となって考えていける〔場〕を提供し、いついつまでに、基本計画を立てて、いついつ事業認可を取って、いついつ着工して、などという行政の立場からの必要なスケジュールにとらわれず、今後 30 年・50 年先の未来をも見据えた、松戸らしさを、皆さんと共に考え、意思決定し、作り、その後もマネジメントしていけるような仕組みを作っていければと考えております。

とは言いましても、何年も掛かってよい、ということとは違うと考えております。

折しも、時代は〔令和〕に変わり、温故知新で生まれ変わるにはちょうど良い機会だと思います。そして、時代の流れは本当に早まっている中、まちづくりも〔スピード感〕を持って行うことが出来なければ、構想している間に時代が流れて行き、構想していたことが実現した時には、もう時代遅れとなりかねません。

本日を皮切りに、本日のシンポジウムのようなイベントは数多くはできないかもしれませんが、松戸にお住まいの方、訪れる方、学生や子育て世代の方、高齢者などのご意見をお伺いするプログラムを組み、公表し、皆さんと共に考えていける場を提供して参りたいと考えております。

そして、スピード感を持って皆さんの意思を形としてまとめ、さらに多くの市民の皆さまにパブリックコメントという形で意見をいただき、皆さまと共に考えた案を、市全体の思想としての形に仕上げたいと考えているところでございます。

それらのプロセスは、松戸に住みたい、松戸で暮らしたい、松戸を訪れたい、やっぱり松戸だよ、ね、と思い、広めていっていただけるような〔松戸ブランド〕を目指すためと考えております。

松戸駅周辺における計画

- 松戸駅周辺まちづくり基本構想
- 新拠点ゾーン整備基本構想
- 今後
- 新拠点ゾーン整備基本計画



皆さまとの将来ビジョンの共有をまちづくりのプロセス(過程)に含み、

松戸ブランドを創りあげる

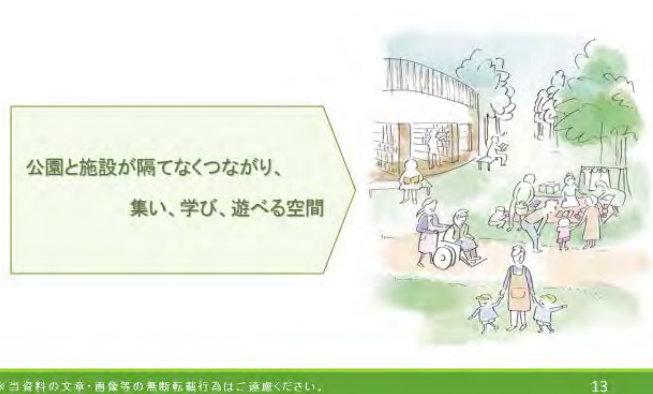
これまでに、松戸市では、平成27年6月に、『松戸駅周辺まちづくり基本構想』を、平成30年3月に『新拠点ゾーン整備基本構想』を作成して参りました。

これらは、大枠の方向性やコンセプトをお示したものであり、具体的な内容には触れておりません。市民の皆さまの声を、市民説明会・パブリックコメントなどで、お伺いして作成したものです。今後は、『新拠点ゾーン整備基本計画』の作成を予定しておりますが、これは、今までのような進め方でよいとは考えておりません。理由は今まで申し上げたとおりです。

松戸駅周辺を、未来の松戸ブランドのために大きく変えていきたいと思いますということを共通目的として、どんな使い方、使われ方が好ましいのか、そのためにどんな施設が必要か、そういうことについての計画となります。そのため、市民の皆さまと共に作っていきたいと考えております。とはいえ、本日はまたとない機会でございますので、何も無い中で皆さまにご意見を伺うのも難しいので、最後に、例えばといったところでの整備イメージを簡単にご紹介させていただきます。



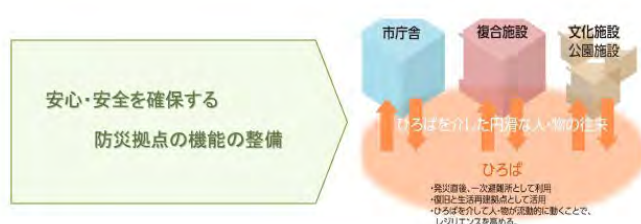
松戸のポテンシャルは、都心に近い立地、そして育んだ歴史・文化、そして都心にはない地域コミュニティの力であるという考えのもと、また、松戸駅直近に中央公園という緑豊かなポテンシャルがあり、その周辺は有効活用が可能な国有地が広がっていることから一例をあげますと、例えば、都心に働く方が、都心ではなく松戸駅周辺でテレワークが可能なスペースがあり、近隣に子育て支援施設を利用することで、子育てとの仕事の両立ができる場や仕組みがそろっている。



また、週末や余暇時間を、家族と共に過ごせる施設や空間が隔てなくつながり、子どもは文化や緑に触れ、親は子どもとの時間を共有しつつゆっくりと過ごす。

中央公園を中心として周辺の施設が、敷地の境界にとらわれず隔てなく広がり、様々な活動の主体となる市民や団体が、ひろばを時々に応じて広く、あるいは小さく有効的に使い、市民と共に集い、遊び、学ぶことが出来る。

これらの空間をマネジメントしているのは、市民団体や民間、また市民を中心とした協議会のような組織であり、エリアの活性化や管理運営を主体的に行い、皆に親しまれながら変化する時代にに応じて、市民のライフスタイル・ワークスタイルを支え続ける。



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

14

さらに、市民の皆さまにとって一番大切な安心・安全の確保のため、万が一の震災などでの帰宅困難者の避難や、災害からの復帰への防災拠点の機能もしっかりと整える。



※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

15

そしてエリアがエリアとして独立しているのではなく、西口や東口で活動している団体や地域住民、そして商いをする方々とも連携して回遊性を生み松戸駅周辺が、働き、学び、遊び、暮らしでつながる空間となる。

かなり雑ぱくではありますが、このような松戸駅周辺はいかがでしょうか。

繰り返しにはなりますが、市民の皆さまとともに、取組んで参りたいと考えております。この作業は、松戸の将来を担う作業となりますので、なるべく次世代の松戸を担う若い人や、新しい時代の担い手の方などにも、多く参加していただきたいと考えております。

なお、一部報道にて、国有地跡地に導入する施設が既に決まったかと誤解を与えるような記事がございましたが、こちらにつきましては、今後、市民や議会の皆さまのご意見を

踏まえて決定していくものとなりますので、その旨を申し添えさせていただきます。



松戸市の未来を明るくしていくため、皆さまのご協力をいただけますよう、お願い申し上げます。私からのご紹介とさせていただきます。

ご清聴ありがとうございました。

松戸市説明（これからの市役所のあり方）

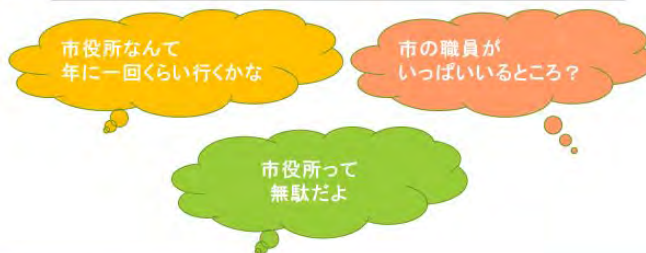


●財産活用課長(高橋)

財務部財産活用課の高橋でございます。よろしくお願いいたします。

私からは、今、新拠点整備課長の話を受けまして、市役所のあり方のその考え方につきましてご紹介をさせていただきたいと思っております。

◆市役所に対するイメージは…



皆さまは、市役所という言葉から、どのようなことを思い浮かべられますでしょうか。

「市役所なんて、年に1回くらい行くかな。」「市の職員がいっぱいいるところなんじゃないの。」「なんか市役所って無駄だよな。」など様々なことが浮かんでこれ、多分ひとりひとりみなさん違うのでないでしょうか。

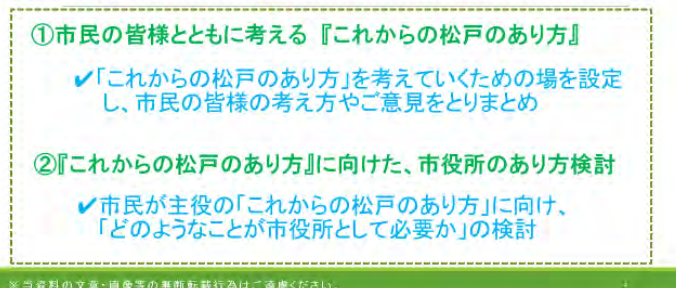
本日は、貴重なお時間をいただきまして、これからの市役所のあり方につきまして、その考え方をご紹介をさせていただきます。

◆市民の皆様を主役とした、今後の取り組み



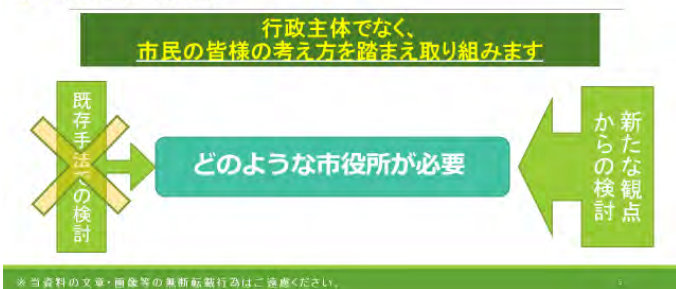
まず最初に、先の新拠点整備課長の説明にもございましたが、松戸のポテンシャルを生かし、歴史・文化を踏まえ、都心にはない地域コミュニティが残っているこの松戸という地域におきまして、松戸市に暮らす人々、松戸市を訪れる人々が、街の魅力を感じ、「ずっと松戸で暮らしたい。」「また、松戸に来たい。」と思われるような〔新たな松戸市の魅力〕を、市民の皆さまを主役として、取り組んでいくこととなります。

◆市役所の役割



そして、今後の取り組みの中で市役所の役割は、1番目には〔これからの松戸のあり方〕を考えていくための場を設定し、市民の皆さまからの考え方やご意見をお聞きし、まとめていくこととなります。

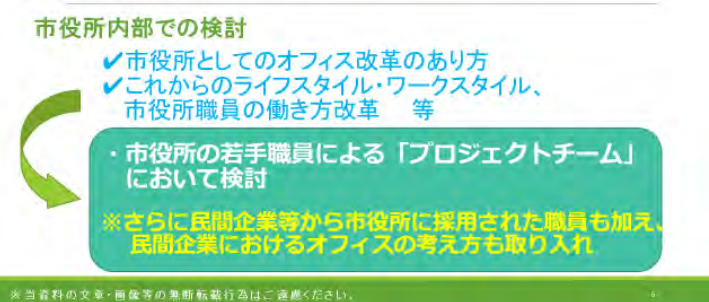
◆新たな観点からの検討



2番目といたしましては、市民の皆さまが主役として考えていただける〔これからの松戸のあり方〕に向け、〔どのようなことが市役所として必要であるか〕を考察していくことになります。これが、これからのご説明でございます。

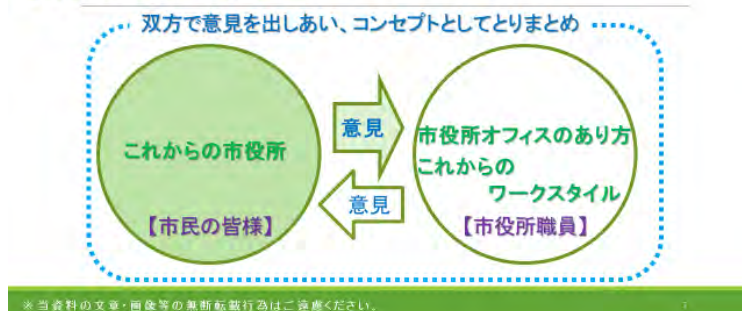
しかし、これも行政が単独で考えていくということではなく、〔これからの松戸のあり方〕を踏まえた上で、再び市民の皆さまと一緒に考えて参ります。そして、30年後、50年後という未来の松戸における市役所のあり方がどのようにあるべきかにつきまして、市民の皆さまとともに成長し、その時代時代にあわせた松戸に対応することができる市役所をとともに作って参りたいと思っております。

◆行政としての取り組み



これらのことを実現していくためには、市役所も変わっていかねばなりません。今までと同じ手法で業務を行っていくことはできません。そのためには市役所のあり方につきまして、既存と同様な検討をするのではなく、新たな観点からの検討が必要となります。そして、行政主体ではなく、白紙の状態から市民の皆さまの考え方を踏まえて取り組んで参ります。また、一方で行政としての取り組みにつきましても変えて参ります。

◆市役所あり方のとりまとめ



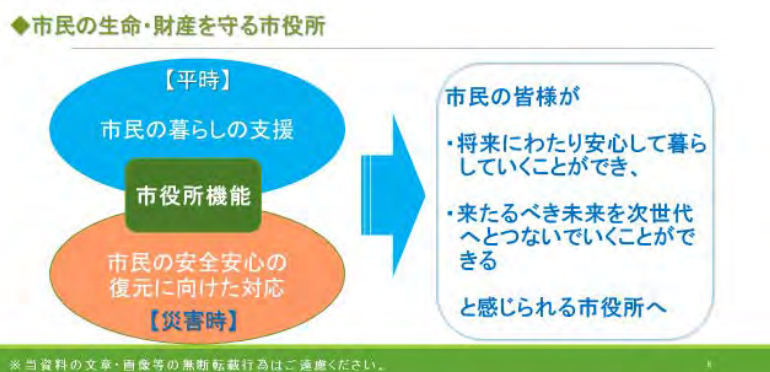
そのためには、行政内部でも既存の検討方法によらずに、これからの松戸市の行政を担っていく、市の若手職員によるプロジェクトチームを組織いたしまして、〔市役所としてのオフィス改革のあり方〕〔職員のこれからのライフスタイルとはなにか〕〔これからのワークスタイルとはどのようにになっていくか。働き方改革はどうか〕を検討して参ります。また、松戸市では平成24年度より民間企業等職務経験者の採用を行っております。採用となりました職員は、その民間企業等での職務経験を生かし日頃より業務を行っております。そこで、今回はそのような若手の民間企業等で働いた経験を持つ職員も加えまして、市役

所としての観点からだけでなく、これらの職員がかつて働いた経験のある民間企業におけるオフィスの考え方も取り入れていきたいと思っております。

これらのことを実施していく中から、市民の皆さまからお預かりをいたしました〔これからの市役所〕に対する考え方やご意見、それに市役所職員で検討いたしました〔今後の市役所オフィスのあり方、働き方改革などのワークスタイルの変化〕などを、一つのコンセプトとしてまとめて参ります。

いずれにいたしましても、これは市民の皆さま、職員のどちらか一方では完成することはできません。市民の皆さまのご協力をいただきながら、双方でより良いものにするため意見を出していくことが大切なことですので、これからも市民の皆さまのご協力をお願いいたします。

そして、これらの過程を経ていくことによりまして、できあがるコンセプトにつきまして、これに関わった職員はもちろんのこと、それ以外の職員も「こんなに松戸はいいところですよ。」「松戸に一度来てみてください。」と、市の広告塔として様々な場面で情報発信をして参ります。



次に、市役所の果たすべき役割としては、市民の皆さまの生命・財産を守ることがございます。これは、市役所が担うべき重要な業務でございます。

これには、平時において市民の皆さまの暮らしを支え、震災などの大規模災害発生時には市民の皆さまの安全安心を復元していくための様々な対応をすることになります。

これをとおして、市民の皆さまが日頃より、〔将来にわたって安心して暮らしていくことができ、また来たるべき未来を次世代へとつないでいくことができる〕ということを感じられるようにして参ります。

市役所の果たすべき様々な業務を行えるようになることは当然のこと、〔これからの松戸のあり方〕を踏まえた上で、〔これからのオフィスのあり方〕〔ワークスタイルの変化〕にも対応し、日常生活の中で、市民の皆さまが〔松戸の魅力〕を感じ、安心して過ごしていただけるようにして参りたいと考えております。

繰り返しとはなりますが、これからの市役所は、〔これからの松戸のあり方〕を重要なコンセプトとして掲げ、これに対応することのできる機能を持ち、別の面では市民の皆さま

の生活および財産を守っていく機能を備えていくことになって参ります。

そのためには、ここまでご説明をさせていただきましたが、市民の皆さまとともに、今後作成する予定でございます考え方に取り入れて参りますので、ぜひお力添えをお願いいたします。

◆最後に

これからの市役所は

- ・「これからの松戸のあり方」に対応できる機能を持ち
- ・市民の皆様の生活・財産を守っていく機能を備える

皆様のご意見を伺いながら、
今後、市役所の基本的な考え方を検討してまいります

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

最後となりますが、今後とも、本日この会場にお越しいただきました皆さまからも貴重なご意見等をいただき、そして、市民の皆さまのニーズにお応じ、ともに変わっていくことができる市役所を目指して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

以上、私からのご説明とさせていただきます。長い時間ありがとうございました。

パネルディスカッション（紹介）

●司会

ただいまからパネルディスカッションを始めます。

初めに、ご出演の皆さまをご紹介いたします。コーディネーターは先ほどご講演いただきました横張 真 様でございます。

（拍手）

コーディネーター



横張 真

松戸駅周辺まちづくり委員会 委員長

都市やその郊外の緑地環境計画・ランドスケープ計画を専門として都市農業、縮退時代の都市緑地計画、アジアの都市地域のサステイナビリティ等の研究を行っている。

【略歴】

東京都向島生まれ

東京大学大学院修了 博士（農学）

東京大学大学院工学系研究科教授

筑波大学大学院システム情報工学研究科教授、

東京大学大学院新領域創成科学研究科教授を経て退職

京都大学、早稲田大学の非常勤講師、グルエフ大学（カナダ）、

パリー大学（イタリア）、アデレード大学（オーストラリア）等の客員教授を兼任

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

続きまして、パネリストは初めに、神戸芸術工科大学教授の西村 幸夫様でございます。
(拍手)

パネリスト紹介



西村 幸夫

まちの活性化・都市デザイン競技審査委員長

2018年には松戸駅周辺を対象地区とした第20回「まちの活性化・都市デザイン競技」記念シンポジウムにて講演

【略歴】

福岡市生まれ

東京大学 都市工学科卒、同大学院修了

明治大学助手、東京大学助教授を経て、

1996年 東京大学大学院教授（～2018年）

2011年 東京大学副学長（～2013年）

2013年 先端科学技術研究センター所長（～2016年）

2018年 神戸芸術工科大学教授

海外では、アジア工科大学助教授（バンコク）、MIT客員研究員、コロンビア大学客員研究員、フランス国立社会科学高等研究院客員教授などを歴任

専門は都市計画、都市保全計画、都市景観計画 など。工学博士、東京大学名誉教授

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

西村様は、福岡市出身。都市計画や都市景観計画などを専門とされ東京大学の名誉教授でもられます。また、日本イコモス国内委員会（国際記念物遺跡会議）委員長や日本ユネスコ協会連盟未来遺産委員会委員長などを歴任されており、昨年7月に開催された『第20回「まちの活性化・都市デザイン競技松戸市長特別賞表彰式・記念シンポジウム ～都市デザインから考える松戸駅周辺の将来像～』においては、基調講演講師とパネルディスカッションにおけるコーディネーターとしてご参加いただいております。

続きまして、東京大学大学院教授の、宮城 俊作 様でございます。
(拍手)

パネリスト紹介



宮城 俊作

ランドスケープアーキテクト、アーバンデザイナー

【略歴】

京都府宇治市生まれ

千葉大学 園芸学部造園学科卒業

京都大学大学院農学研究科博士前期課程修了

ハーバード大学デザイン学部大学院修了

農学博士（京都大学）

千葉大学 助教授、奈良女子大学大学院 教授、放送大学教授を経て、

2019年より、東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻教授

1992年より、設計組組PLACEMEDIA・パートナー

2010年より、宗教法人平等院・代表役員

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

宮城 様は、京都府宇治市出身、ランドスケープアーキテクトやアーバンデザインを専門とされており、主なランドスケープ設計作品には、「ザ・ペニンシュラ東京」や「ギンザ・

シックス・ガーデン」、「宮城県南三陸町震災復興祈念公園」などがございます。また、日本造園学会賞や日本建築学会賞、グッドデザイン賞を受賞されるなど、様々な受賞経歴もございます。

最後に、千葉大学大学院准教授の、秋田 典子 様でございます。

(拍手)

パネリスト紹介



秋田 典子

松戸駅周辺まちづくり委員会 副委員長

まちづくり条例や景観条例の実効性、開発協議やまちづくり、景観誘導等に関する制度等を研究。緑地利用を中心に、これからの都市の在り方を研究し、東日本大震災の復興支援に生かすなどの実践を行っている

【略歴】

大阪出身

千葉大学大学院 園芸学研究科准教授

2004年東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻博士課程修了

博士（工学）（東京大学）

千葉大学大学院園芸学研究科緑地環境学コース緑地環境管理学研究室

東京大学国際都市再生研究センター研究員

東京大学大学院新領域創成科学研究科研究員を経て、
2008年12月より現職

※当資料の文章・画像等の無断転載行為はご遠慮ください。

秋田 様におかれましては、日本造園学会理事、国土交通省 社会資本審議会都市計画基本問題小委員会等を歴任されており、昨年より松戸駅周辺まちづくり委員会の副委員長にご就任いただいております。なお、松戸市都市計画審議会委員をはじめ、松戸市空家等対策協議会委員や松戸市景観審議会委員長など、各所で松戸市にご尽力いただいております。以上をもってパネリストの紹介とさせていただきます。

詳細な経歴等につきましては、お手元に配布しております、リーフレットをご参照ください。パネルディスカッションでは、基調講演や市からの説明に対して、コメントをお願いしたいと思います。なお、今後の進行は、コーディネーターの横張 真 様をお願いしたいと思います。

それでは、横張 様、よろしくお願ひいたします。

パネルディスカッション



●コーディネーター(横張 真 様)



はい、かしこまりました。

それではこれからパネルディスカッションを進めて参りたいと思います。

お時間といたしましては、大体今から1時間程度をパネルディスカッションとして進めさせていただき、次にフロアの皆さまからの様々なお質問等をお受けするといった時間を20分程度かと思えますけれども、ご用意させていただきたいと思っておりますのでよろしくお願いしたいと存じます。

さて、本日のパネルディスカッションですけれども、少し設(しつら)えもリラックスした形をお願いいたしました。よくある、長机が置いてあって名前が書いてあるような形ですと、どうも堅苦しくなってしまいますし、皆さまとのインタラクションも中々難しくなってしまうので、このようなりラックスした形で設えさせていただきました。

我々としても、なるべくそうした中で自由闊達にご意見をお願いしたいなと思っている次第でございます。

本日は事前に、大きく3つのお題を皆さんにお願いしました。

第1番目はですね、先ほどの私のお話しの中でもさせていただきましたけど、今の松戸がどういった課題をもっていると認識していらっしゃるか。これを第1ラウンドとして皆さまに一言ずつ伺いまして、次には、一方における、松戸におけるポテンシャルですね。

「松戸はこういういい点があるぞ」とか、「こういう点を活かしていけるんじゃないか」とかですね、そういったポテンシャルについてそれぞれのお立場からを伺いまして、最後は、そうした課題やポテンシャルを踏まえながら、将来の松戸のまちづくりはどう考えていったらいいのだろうか、今の段階ではあまり具体的な話しというのは難しいかもしれませんが、「考え方としてこういうことじゃないか」とか、あるいは「こういった所にもっと注目すべきではないか」とか、そうした将来のまちづくりの方向性やアイデア、そういったあたりをお伺いする。こういった3ラウンドで、お三方にそれぞれ様々な立場から

のご意見をいただこうと思っております。

3ラウンドございますので、大体1問につき5分から10分程度でおまとめいただけると、ちょうど時間で収まるのではないかと、百戦錬磨の皆さんですので、その辺は私は全く心配しておりませんが、ぜひご協力をお願いいたします。

それでは第1題目ですね。課題といったところですけども、レディーファーストでよろしいですか、今の時代レディーファーストって言っちゃいけないのかな。

(笑い)

遠い順番からこっちいたりこっちいたりしますので、お願いしてよろしいですか。じゃ、秋田先生、あの今千葉大にいらっしゃってですね、毎日大学の方に通勤していらっしゃるといふ所も含めてどういった所に課題を認識していらっしゃるか、まずは皮切りにお願いできますでしょうか。

●パネリスト(秋田 典子 様)



はい、ありがとうございます。

改めまして、みなさんこんにちは。千葉大学の秋田です。ありがとうございます、元気のいい挨拶ありがとうございます。

このメンバーの中で、唯一ほぼ毎日地元に通っている千葉大学の秋田と申します。よろしくお願いいたします。

どうでしょう、スライドを用意してきたんですけども、それを最初によろしいですか。先生からいただいた課題に対して、全部まとめて言うってしまうようなスライドとなっているんですけども、少しスライドを用意してきたので、そちらを紹介させていただきたいと思えます。

本日は、ライフスタイル・ワークスタイルの変化と新しいまちづくりということで、先ずはですね、私自身は課題は何だろうと考えた時に、これからやらなきゃいけないことは、新しいライフスタイルを生み出すたくさんの物語を松戸の皆の手で作ろうということを経験のテーマとして考えました。

皆さんがもしかしたらお持ちの封筒とかにもあるかもしれないんですけども、これは、松戸市の市政施行70周年の記念ロゴマークで、私自身もこれを決める会に参加させていただいたんですけども、私は凄く気に入っているんですね。



新しいライフスタイルを生み出す
たくさんの物語を
MATSUDOの
みんなの手でつくる

松戸市制施行70周年記念ロゴマーク



わたしたちに必要なのは
愛着を持って松戸を語る
「物語」だ

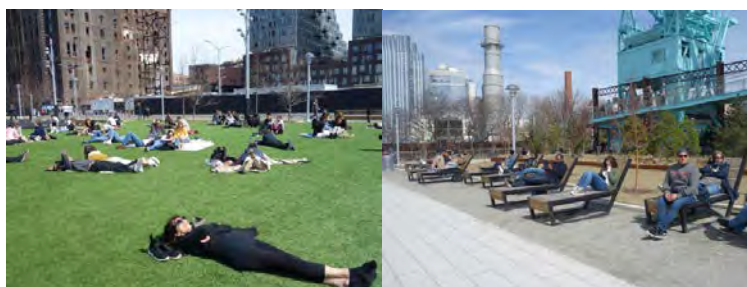
色々な案がでてきたんですけども、これは本当に凄く優しいイメージで、これはですね、松戸の資源であるネギだとか梨だとか、それから鶴(こうのとり)が子どもを連れてきてくれるだとか、それから優しい表情の人とか、もちろん松戸の〔松〕とかですね、そういう松

戸の物語が詰まっているから、凄くこれがいいなと思って、私が松戸の中で大好きな物の一つです。

私たちに必要なものはですね、私たちっていうのは松戸の我々っていう意味なんですけど、それは今のロゴマークみたいに、愛着をもって松戸を語れる物語ではないかという風に思っています。それが今は少し欠けていて、先ほど横張先生から〔住みたくないまち〕なんて話しがでてきましたけども、それは、「暴走族が多い」とか「客引きが多い」とか、そういうのも私自身も感じている所もあるんですけど、それはそれとして、私たちが愛着をもって松戸を語っていけばいいのではないかと思っています。で、この話しをしていきたいと思います。

では、新しいライフスタイルは何だろうということで、横張先生が色々ご紹介してくださったのですが、私もちょっと「松戸に似てるかな」と思った場所を紹介させていただきたいと思います。

これは、世界で最も熱い場所と言われている一つでなんですけども、しかも「松戸に似てるかな」と思って紹介するんですけども、こちらです。



これはですね、ニューヨークの東側にあるブルックリンというところにある、公園の専門の先生たちが多いのでご承知だと思うんですけども、そこにできたてほやほやの新しい公園です。周りにはですね、古い工場に囲まれているんですけども、こんな感じですね。

工場の使っていた煙突だとか、そういったものを全部残して、そこに新しい公園を作っていますね、そこにたくさんの市民の方々が集うという場所となっています。



新しいライフスタイルって「こんな感じかな」と思いながら、この公園に来る親子なのか、ただ子育てをやっているバイトなのか分からないんですけども、とにかく自由な形で公園にたくさんの人が集ってくるといった状況なんですけども、この背景から見ても分かります、凄く綺麗なおしゃれな場所じゃなくて、ちょっと色々と問題があったような場所なんですけども、でもそこが、公園などを軸にしながら新しく生まれ変わってきています。

ここは、ドミノパークという場所で、ドミノシュガーというアメリカ人はみんな知っているような、砂糖会社の工場があった所なんですけども、そこがもう本当に一言でいうと、芋の子を洗うぐらいたくさん人が集まって、皆がそこを自分の場所として使ってくつろいでいるんですね。



そこは、砂糖工場の物語っていうのがあってですね、それをみんな楽しみながらここに集ってくると。そこに物語があるから人が集ってくるといった場所なんですね。

このブルックリンには、ダンボっていうのは、象のダンボとは全然別なんですけども、マンハッタンから橋を渡った所にダンボっていう場所があって、例えばそこに、ダンボがやってくるといった物語に繋がっていくんですね。

場所なんですけども、真ん中に見えてる島がマンハッタンで、ニューヨークの中心なんですけれども、そこからやや東側がこの新しいライフスタイルの発信地であるブルックリンになっています。



さっきお見せしたドミノパークっていうのは、この辺にあるんですね。「そういえば」って思うんですけども、最近東京でホットだと言われている、清澄白河(きよすみしらかわ)とかも東京の川の東側にあるんですね、で、松戸もやはり東京の川の東側なんですね。



「なんか似てるな」と、ブルックリンに行った時に、「なんか松戸もこんな風になれるか

な」と色々見ていたんですけど、松戸とブルックリンを比べてみるとブルックリンの中で特におしゃれだと言われている、ウィリアムズバーグホテルという所なんですけども、そこにアーティストがペインティングなんか隣のビルにしています。



ここは地元の、アーティストとかが色々なものを手掛けている場所なんですけども、これ、松戸ですよ、皆さんお馴染みの景色だと思うんですけども、「なんか似てない？」と私自身は思ったんですよ。



違うっていう声が聞こえてくるかもしれないですけども。

(笑い)

これも松戸の写真ですけども、その中心のやや東にあって川を渡った所でなんとなく似ているのではないかと、これブルックリンのブルックリンブルワリーですけども、そうだと、知ってる人はみなさんご存知だと思いますが、松戸も松戸ビール。松戸のブルワリーができた。

それから、さっきの小商いとかもそうなんですけども、そういうものが松戸の中で生まれてきていると。先ほど、どんな暮らしが新しいのかっていうとですね、もちろんスマートな暮らし方、コンパクトな暮らし方もあるんですけど、もうひとつ今凄くおしゃれなのが、ローカルなんです。



松戸に初のブルワリー「松戸ビール」 築53年の古民家を改修



引用元:
松戸経済新聞
2019.3.27

このブルックリンというのもローカルのアーティストでローカルの松戸も松戸ビール。ローカルのお店で、という風なことをやっていて、そのポテンシャルが松戸には十分あると思います。

ちょっと長くなったんで最後飛ばしますけども、私が関わっている、東北の被災した場所も、ここも物語っていうものが人を惹きつけているんですね。元々震災の後、本当になんにもない場所なんですけども、そこにたくさんの人たちが集まってですね、花を植えて震災後初めて花が咲いた場所になってですね、そこが少しずつ人が集まる場所になって、そのうち、もっとバリアフリーのみんなが来れるような場所にしようということで、かなり話し飛ばしてるんですけども、新しくもう一度ガーデンを作り直してたくさんの方が集まる場所になったと。



私自身は、この新しい拠点っていうのを軸にして、松戸でどんな物語をみなさんと一緒に作っていただけるのか、それが将来の希望というかこれから楽しみにしている所になっています。はい、以上です。

松戸でどんな物語を作ろうか



● コーディネーター(横張 真 様)



はい、ありがとうございました。

課題というよりは、むしろポテンシャルという部分も含めて今だいぶお話しいただいたかったかなと思ったんで10分許容いたしましたけども。冗談ですよ。

(笑い)

そうですね、そのやはり愛着をもって語れる物語っていうあたりが1つのキーワードであるというお話だったと思いますね。非常に私も同感する所ですね。

ただしその、愛着をもって語れる物語っていうのは、そんな素晴らしい話である必要は

ないってことですよね、ごくごく普段着と言ったらいいか、そういったその話しを地元の方々が熱く語ってみたりそれを凄く伸ばしていこうとしていたり、そういった理解でよろしいですかね。

● パネリスト(秋田 典子 様)



はいそうです。小さな物語をたくさん紡いでいけたらいいなと思っております。

● コーディネーター(横張 真 様)



はい、どうもありがとうございます。では次、宮城先生お願いできますか。

● パネリスト(宮城 俊作 様)



はい。どうも皆さんこんにちは。宮城です。

実は私、松戸市民であったのが約 10 数年ございまして、長女は相模台小学校の卒業生です。そのあと家族は実家のある京都に戻りまして、引っ越しをする時に、私の家内が「住めば都ってというのはここには当てはまらなかったかも」と一言言って。

(笑い)

別に毒づいたわけではないですけども、京都へ戻って行ったということがございまして、そうなのかなという風に思っていました。

ただ一方で、そのまちのありようの感じ方というのは、世代によってかなり違うという事を思っております、というのは、長女や長男は、必ずしもそうは受け取っていません。ちなみに私の長女はもう 30 歳を過ぎていますが、つい最近小学校時代の友達と会うために松戸に来た。確かに何も変わってないけど、でももの凄く懐かしさを感じて、今の状態で「なんかお父さん松戸で何かやってるらしいけど悪い所あるの」とか言う、見方もしております。

なかなかこれは、一概に色々な世代の人が色々な感じ方をするという点では、ひとくくりにして語るのはなかなか難しいのかなという風に思います。

さて、今日お題になっています、新しいライフスタイル・ワークスタイルですけども、こういったものに出会う場所はどういった所だろうか、ということをお話させていただければと思っております。

松戸にいまそういう場所があるかどうか、あるとすればどこにどういう可能性があるのか。そのあたりも含めてです。

で、最初に、ご覧いただくのは、2枚の写真でして、同じく東京にある2つのスペースです。やはりパブリックなスペースです。左側もご存じのように東京都庁の都民広場、右側は、今かなりホットな場所ですけども、豊島区の池袋にあります南池袋公園です。これは両方とも公共的に作られているスペースですけども、ここにはっきりとライフスタイルというのか、つまりパブリックなスペースはどうあるべきなのか、これからということ。ちゃんと表れているのではないかと思います。少なくとも左の場所で、ライフスタイルやワークスタイルを語るというのはなかなか難しい。もちろんこういう場所が必要であるということを、我々は思っていますけども、同じように考えた時に、違う解き方もあるのではないかとも思うわけです。

どうしてこの右側の南池袋公園がこれだけライフスタイルを反映しているのかということ、実際行かれた方も何人かいらっしゃるかと思います。ここに来ると何かしら自分たちが新しい暮らしをしているという、そういう幻想かもしれませんが、感じることはありません。スペースとしては、そんなに大きいスペースではないです。普通の昔でいうと児童公園、今でいうと街区公園ぐらいの大きさの場所なわけです。

この場所どういう場所だったかということ、左側は整備がされる前の状態です。よくありがちな木が茂って大きくなり見通しが悪くなっている感じ、繁華街に近い所というところで、たくさんホームレスの方もたくさんいらして、その人たちのための炊き出しなんかも行われていたと。一般の方は、近づき難いと。

私自身は、公園がこのような使われ方をすること自体は決して悪い事ではないと思っています。公園はある意味では、社会の安全弁(あんぜんべん)のような役割を果たしてきたのは歴史的に見ても事実ですので、こういった機能も一部で共用されるべきなのだろうと思います。

ただそれが、すべてそうなのかということそうではないだろうと。ここの公園の場合は、どうしてあのような形になったかということ、右側にありますように、これまでの行政が作る空間としての作り方、整備の仕方というのを敢えて施行しなかったと。だから住民が市民、区民がと言ってもいいかもしれませんが、発意をして自分たちでどういう風に作っていったらいいだろうかとしっかりと自発的に考えて、かつ、それを行政がサポートするという、こういった体制がしっかりできていたからだ。ということですね。

あの緑色の芝生、あれはいわゆる常緑の芝生でして、日本ではあまり見かけないものですが、実はものすごく手間がかかります。当然コストもかかります。コストはかかりますが、かけることができるだけの仕組みをあの公園ではつくっているということ、これもやはり、区民の人たち地域住民の人たちが、考える方法で、実際にはレストラン上手く誘致して、その賃料を区にそのままいれるのではなくて、一旦は入るとは思いますが、それをここでちゃんと使えるようなそういう仕組みを作ったということ。です。

もう一つ、同じような既存の公共空間の再生のお話しをさせていただきます。これニューヨークのお話し、先ほど、秋田先生はドミノパークのお話しをされましたけども、こちらもニューヨークでは大変有名になっている所です、ブライアントパークという名前がついています。

左側の写真は1970年ぐらいのものでして、この場所、マンハッタンのど真ん中にある所ですけども、70年80年ぐらいはですね、違法薬物の取引ですとか売春の斡旋ですとか、あるいは殺人なんかも起るような、とにかく地域にとってはとても恥ずべき場所として位置づけられて、あまり人が近寄らなかったというそういうことがあります。

それが今右の写真にありますように、物凄い数の人たちが来ている。これはもう観光地としても今は大変な人気を博している。どうしてこういうことができたかという、これは、この地域をこの赤線で囲った部分ですけども、ビジネスインブループメントディストリクト、日本語で言うと要するに業務機能を強化して改善していく特別な地域として位置づけて、実はここでビルを経営している人たちは、あがってくる賃料にある程度上乗せすると、それを財産税という形で市に収めて、その余剰分を元に戻す。

つまりこの、公園の運営に使えるようなそういう税制上の仕組みを作ったという事です。実際はですね、この部分が非常にレベルとしては、割合としては減ってきており、実際はその広告料収入ですとか、そういったものでどんどん自前で出来るようになってきていると。

これ、ご存じのように松戸の中央公園でございまして、先ほど申しましたように、私の子供は小さい時に随分ここで遊んでいたわけですね、「その時と全く変わっていないわね」と言っておりましたが、残念ながらいつ行っても人が全然いないという状況で、このあいだのイベントの時は随分いらしたというお話しでしたけども、これもつくりかえ方が上手くなれば、なんとかなる可能性は随分秘めている場所だとは思っています。

先ほど、この絵は拠点整備課長の渡辺さんがお話しされた時に出ていたと思いますが、左側が先ほど横張先生のお話しにあった、新しいライフスタイルやワークスタイルは一体どういったものなのか、とにかく時間の使い方あるいは物の消費の仕方が随分変わってきていると、変わろうとしている、あるいは変わらなければいけないという社会状況の中で、その部分をどのように使うのかという事が右側に書かれています。

特に消費という事に関して言いますと、モノを買いにどこかへ行くという時代はだんだんこれから低減していく訳ですね。無くなっていくと、むしろ物ではなくてこと、つまりわざわざその場所に行く、そのきっかけがどうしても欲しいということだと思います。それができれば、新しい拠点、松戸の中心部の活性化というのがかなり上手いくのではないだろうか。その時に建物中心ではなくて、これからは、先ほどの公園でもお見せしたとおり、いわゆる広場やそういった場所になるのではないかと、中心はですね。

その周りに様々な、市民生活、単に暮らしではなくて、学びや遊び、そういったものを全部含めて、あるいは暮らしの中には、単に働くということだけでは無く、もちろん子

育て支援や介護っていうことも全部要するに集中してくる訳ですね。それらが一つ円環のような形、ハブと呼んでいますけども、こういった形で起こって、広場を中心に起こって、それに新しい市庁舎であるとか、そういったものが上手く関係してくるとい、こういう柔らかい連携ができる状態ってというのが一番いいだろうと。そういった所では、小さくて恐縮ではございますけれども、本当に色々な事が起こると思います。

先ほどのコワーキングのようなものもあるし、それから図書館なんかもですね、いわゆる図書館という非常に硬い空間のイメージではないものになっていく可能性もあるだろうと。こういった学びも含めた遊びも含めた暮らしも含めたものが、ボーダレス・シームレスに繋がっていくそういう場所、広場を中心として作っていくと。

先ほど最後に市庁舎のお話しがございました、で、こういったお話しも、今のお話しの一翼を担うということになっていくという風になりますと、かつてこの街には松本清さんという市長さんがいらして、この方の名言ですけど、「市役所とは市民の役にたつ所」こうおっしゃった。

これは昭和から平成にかけてのお話して、次の時代はですね、「市民が役者になる所」役者っていうのはつまりプレイヤーだと、これには当然ケースバイケースで主役の人もいれば、いわゆるバイプレイヤー脇役の人もあるし、ちょい役の人もあるかもしれない、それは場面によって、あるいは物語によって変わっていくと思います。そのためのステージが先ほど申し上げましたような、広場になっていくのではないだろうか、ということでございます。とりあえず、ちょっと長くなりました失礼。

●コーディネーター(横張 真 様)



はい、どうもありがとうございました。

色々な話題を出していただき、やはり、かなり今後の展望の部分随分とお話しをいただいたかと思いますが、また後で色々伺いたいと思います。

市民が役者になる所と言ったようなですね、少しシンボリックなキーワードもいただきありがとうございました。それでは西村先生お願いできますでしょうか。

●パネリスト(西村 幸夫 様)



はい。先ほど秋田先生も愛着を持って語れる物語というのをおっしゃっていましたが、私も本当そうだなと思いますが、実は私も都市の形成や歴史から将来の物語を作りたいとずっと昔からやってきた人間ですけれども、その意味では松戸の歴史を見てみるとその中に既に物語があるのではないかと、それをもうちょっときちんと皆が共有できるようなものにする必要があるのではないかなと思います。

宿場町が都市になっていったと、その時は凄く色々な課題がありまして、なぜかという、宿場町というのは基本的にリニアなので、都市としてもう少し面的に都市を作ってい

くのにはどうしたらいいのかという問題がある。それとか、城下町と違まして近代化をする中で、都心部に空き地が無い所です。

城下町だったらお城が無くなるし、武家屋敷がその分転用されますから、公共施設を建てる用地はありますが、宿場町っていうのは、基本的にずっと真ん中が賑わっていますので空き地が無い。そうすると、公共施設を作ったりするのは、全部周りに作ることになります。ここもそうです、水戸街道沿いに、公共施設ってこの建物と郵便局があるぐらいで、ほとんどはこの間にないでしょ。こういう所にはそもそも公共施設は作れなかった、空き地が無いですから。

なので、その具体的に都市をどういう風に広げていくのかと、都心というのは違うところに作らないといけないので、都心をどういう風に今までの都心との関係をどう作るのかと、凄く難しい問題があるわけですね、そこに近代ですから鉄道の駅がきて、駅をどこに作るのかと、凄く大きな問題があるのです。

その意味で考えると、宿場町が、松戸の宿場町は非常にしっかりとした、計画された宿場町ですよ、坂川があんなに裏側にピチッとあって、それもまたS字型に流れていて、川を挟んだ向こう側に神社があるとか、街道沿いから少し離れたところに必ず大きな施設があって街道沿いは、もう少しビジネスで稼げるようになっているわけですよ。

こういう非常に硬くできたまちに、どういう形で面的に広げるのか、首都圏で考えますと、似たような課題をもった街がいくつかあります。

例えば、大宮も浦和もそうです。神奈川だと保土ヶ谷や戸塚がそうですね。そこと似たような課題があるけども、もう1つ違うのは、ここは宿場町だけではなくて、やっぱり、川港（かわみなと）であったと。川で閉じるような形ですよ。

普通の宿場町は両側に裏側に後背地がありますから、どちら側に広げていけば良いという感じがあるけども、松戸は川で切れるので、具体的に片側はもう成長する場所が無いわけですよ。そういう所にどういう戦略でもって今の近代都市としての、松戸をつくっていったか考えると、凄く面白い物語があって、先だってそれをやってきたのではないか。

例えばこの図ですけども、ちょうど駅ができてちょっと経ったぐらいの図ですね、正式図って言いますが、もうちょっと大きくなるのは次かな。



これで見ますと、凄く、私、松戸に降りてやはり同じ宿場町が、都市化をしていった街と比べると違うなと思うのは、都心が凄く高密度じゃないですか、デッキがあって、物凄い商業の集積が凄いですよね、こういうのは中々無い。

それからもう1つ、伊勢丹は無くなりましたけど、伊勢丹の場所が、ちょっと西、南に離れていますよね。一体どうしてあそこに作ったのかと。伊勢丹は最初に駅開発と一緒に作るとすれば、駅の駅ビルに作ったりですか、駅の目の前に作ったりしているはずですからずっと考えました。

色々考えてみると、ここに松戸の駅を作っていますけども、ここの辺が中心ですよ、宿場としては、松戸の神社の向かい側ですよ。この辺に作れば一番都心に近くて乗降客の人が多はずだけど、たぶんこの辺はもう市街地として、広げる余地がなかなかなくて、新しい新市街地をちょっと北側に作ったと思います。

この辺だとまだ周りに開発余地があって、そしてちょうど街道とそれから河岸段丘（かんだんきゅう）ですね、相模台と河岸段丘のちょうど間ぐらいにつくっていますね。

つまりこの辺に新市街地を造る開発余地があるところで、作っていますよね。多分そう。しかし、普通の市街地と違って、もう河岸段丘があるので、ここから東には住めないですよ、ですからその意味では高密度な市街地を、商業地区を作らざるを得ないというのは、ある種の宿命的なものがある。それが物語なわけけれども。

で、もう一つ伊勢丹がなんであそこなのかなと思ったら、これで言うところのこの辺ですね、この辺は小学校だったと。その前は役場だったと伺いました。なんでここが役場だったのかなと思って考えると、ここが1番中心地なので、中心地に1番近いところで公共施設用地が確保できそうな所というところ、この辺が駅近い所だしこの辺がそうですよね。

その意味で、ここの市街地が拡大していく時に開発用地として1番可能性があるのはこの辺ですよ。今日のお話しの中でも、賑わいが南からだんだんいったとありましたが、それはそうだと思います。明らかにここに人がたくさん住んでいるから、つまり南から北に徐々に伸びてくるという歴史がある、だからそこに物語がある。

それからもう1つは、こちら側とこちら側のほぼ同じような、距離があって、今ちょうどこの所デッキで繋いでいて、その道江戸川までいっていますよね。その斜面緑地から川までが一本で繋がっていて、その間がちょうど東口・西口・旧街道・その後背地という感じで、ほぼ同じぐらいの距離で層のようにできています。今なかなかそれは見えませんが、大体同じように見えているので。でもよく考えたらそうなんです。

1つ1つのレイヤーがあるよね、だって最後そのレイヤーが物語として面白く見えてくれば、この街にはこういう複雑な構造があって、それが見えており、その1番東側に中央公園があって。で、そこに市役所がくるのであれば、市役所がもっと都心にくるというもっと珍しい、まさにコンパクトシティの非常にいい例になりますよね。そこから川の緑まで歩いて行けるので、歩いて行けるのが1本の単純な道では無く、いくつものレイヤーを越えながら歩いていくという、もの凄く面白い物語があるということですね。

私はこういうのこそ新しい時代に生かすべきであると、もちろん、高層化しているので、その分、猥雑化する部分も全部引き受けているので、今は問題もあるわけですよ。でもそれをもうちょっと逆転、まさに余地があるわけで、逆転して考えると、非常にそうしたものの個性をそれぞれの所を考え直してですね、やはり東口の課題、東口の個性、西口の個性、色々考えていくと、それが断面で見えてくるような街、その東西軸が、まさに水と緑を繋いでいるという。こういうのは、宿場町でもなかなか無い。

そういう個性になるわけです。問題点もあるけども、物語も既にあると。ただ、普通生活している人はこういう風には考えないわけで、だからそういう目でもう一回見直してみると、そこから色々な課題の可能性などが、見えてくると思います。

はい、終わりです。

●コーディネーター(横張 真 様)



どうも、ありがとうございました。

あの、プラタモリを見ているような、そういうお話だったように思いますね。

(笑い)

確かにそうした目で考えてみると、非常に荘重（そうちょう）として重なっている街のありようが見えてきて非常に面白いなと思いつつながら、私も今伺った次第です。

さて、大分ポテンシャルの方にも踏み込んだ形で皆さまに話題提供いただきましたので、少し先ほどの、3つの課題という話を少し切替させていただいて、皆さんそれぞれポテンシャルの方に踏み込まれて、お話しをいただいている中から、そうしたそのポテンシャルを今後その伸ばすためには、どういう仕掛けなり、あるいは仕組みなり、あるいは何かキッカケとなるような空間があったらいいだろうか。といった辺りを、また皆さまに一言伺いたいと思います。

先ほど、秋田先生からは、愛着をもって語れる物語っていうのがなかなか無く、それを持てるような街にしていくべきだと。そのようなお話しがあったと思いますけども。

そういう愛着を持って人々が、物語を語っていただけるようになるために、何を最初の一步として投げたら良いか、それをちょっと次にお願ひできますか。

●パネリスト(秋田 典子 様)



はい。その答えは1つです。私自身も10年ぐらい駅から大学まで毎日毎日通っているわけですが、ただそれだけ。

つまり、市民の皆さま、市民同士、あるいは私は通っている身ですが、交わる結節点が無い。というのが決定的で、そのような場所がやはりどうしても必要で、松戸市の皆さんだから分かると思いますが。

駅から大学までの中間に小さなパン屋さんがあって、パン屋さんで学生がアルバイトを

しているので、店長さんとも仲良くお話しもしますけども、やはり店長さんも小さい子どもを遊ばせる場が無いと。

私がゆっくりしたいなと思った時にくつろげる太陽のあたる場所とか、パン屋さんの子供たちが、交通を心配しないで安心して遊べる場所とか、色々な人とつながる場所とか、そういうものが、決定的に足りないというのが、この10年間の私が感じている所です。

●コーディネーター(横張 真 様)



はい、ありがとうございます。

結節点となるような、色々な人々が交わることができるような場であってみたい、あるいは仕掛けであってみたい、その不足という点が大きいのと。

次、宮城先生に伺いますが、先ほどご紹介いただいた南池袋公園にしても、あるいはブライアントパークにしても、秋田さんご紹介のブルックリンブリッジパークにしても、いずれも、周りも含めて元々は凄くまずいというかヤバイというか、人が全く立ち入りたくもないような場所であったということですよ。

それがしかし、今も決してそんなに決して良くもないと。南池袋公園は、夜行くと周りが大変に賑やかなネオンがあったりする所ですよ。実は冷静に考えてみると、そんなに凄く良いとも言われるような場でもないのに、ああした公園が凄く活性化をしているという、そのトリガーになった事って一体何だろうと思うのですが。どうですかね。

●パネリスト(宮城 俊作 様)



先ほど西村先生のお話しでね、例えば松戸の古い街のその成り立ちのようなものが、非常に見えにくい状態ですよ。私の父親なんか聞くと松戸って、関西から見ているからですけど。とにかく良いイメージが全然良くなかった。

私自身も千葉大学園芸学部に入學してここに来た時に、決してそういう印象を持たなかった。だけど、今日伺いすると、やっぱり色々あることが分かって。私やはり、ブライアントパークも南池袋公園もそうですけども、そういうのが見える、悪い所じゃなくてね。歴史の積み重なりが見える状態ができていると思います、結局それは。

それは、なにかというと、やっぱり私は引き算じゃないかと。

つまり、建物があつた所が無くなって空き地になった途端、全然隠れて見えなかった部分が見えてくる。それは何かというと土地の表情。あるいは、その人間がずっと積み重ねてきたものが、そこでふわっと出てくるような感じがします。

それで多くの人があることに気が付いて、そこが仮に秋田先生がおっしゃるような、結節点になったとしたら、そこが自然にブライアントパークのような空間になっていくのではないかと。

幸いな事に、これから先そんなに建物をたくさん建てなくてもいい。建てなくてもいいという言い方は良くないかもしれないけど、必要とされない時代になってくる。減縮して

いく方向になっていくし、集約する所は集約していくという方向になっていくと。

ただ、市街地が広がっていた状態から、メリハリがついた状態になった時に、空いた空間がこういった機能を持つかというのがポイントだと思いますね。

●コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。

そうですね、そのノイズを取り除いていく中で、そのノイズがあると見えなかったものが、ノイズを取り除くことによって浮かび上がってくる、その引き算の発想、それが大事なんじゃないかというお話しでしたが、今かなり西村先生のですね、お話しにも近い所で、ご意見いただきましたけども、西村先生からはどういった感じで。

●パネリスト(西村 幸夫 様)



私もそう思います。

例えば私が感じるのは、松戸でノイズを取り払った時に何が残るかってことですけど、1つは先ほど言った坂川です。

坂川の流路って、こんなに人工的なものは無いですよ。これは、完全に都市と一緒に作っていますね。完全に人工的な河川なのでね。特に松龍寺(しょうりゅうじ)でしたっけ、松戸神社もそうですけど、川を越して参道が伸びていて向こう側にある訳です。明らかに街道を作った時に、全てのゾーニングの中にはめ込まれていますよね。

普通裏側に川を通すことはあるけど、裏側に通すなら南北に1本通すだけで、S字型にはしないです。おそらく他の様々な江戸川から入り込んでくる河川とか、様々に繋ぎながら色々作った、非常に複雑な長い歴史に都市をはめ込まれていると思いますね。

で、例えば少し南の方だと、本当に緑の素晴らしい空間だけど、あまりそれをみんな感じてないのではないかと。例えば、駅から川まで行く途中で橋を渡るわけです。こういう所は、まさに結節点になるので少し頑張れば、そこから左右を見ると坂川の行きたくなる道があって、両側のその道、もう少し魅力的になるとかなれば、随分変わるのではないかと。

そういう一個一個のものが結構あるような気がします。斜面緑地とか、お寺もそうだし。こういうのがあると、建物も結構残っていますからね。なんか「ダメだダメだ」みたいな話して、良い所に光を当てて磨いていくことにあまりならないですよ。

そこの発想を少し転換すると、歴史が400年ぐらいあるので、無いわけがないんです。私は日本中のそういった所を見つけて、「面白い面白い」と取り上げて、誰かが面白がるとみんな段々なるわけですよ。だからマッドシティみたいな人たちが面白がってくれればいいけども、そういう風に感じますけど。

●コーディネーター(横張 真 様)



いや、全くおっしゃるとおりですよ。

私もやはり西村先生と同意見ですけど、古いものというと凄い騒音だったり、大きかったり、何百年の歴史があったりとか、そういう所ばかりを引き立ててしまって、それを「文化財として保存しよう」みたいな話しになってしまうけれども。

そうではなくて、今おっしゃったような、ある種のリテラシーをもって読み解いていくと。実はそこに凄い歴史があるということの面白さ、それがまさに物語になり、「面白い面白い」と西村先生のように、言っただけの方を皮切りに次第に広がって行って、「それだったらうちにだってあるよ」みたいな話しが、市民の中にも定着していくと。それがまさに物語になっていくのかなと思いますね。

一方でそのハードですね、物としてこういう資源があるじゃないかという話がある一方で、もう少しソフトの側ですね。人であってみたいり、あるいは社会であってみたいり、そうした所から、松戸の持つポテンシャルを活かしていくと考えた時に、もう少しこういう点があってくれればと。例えば秋田先生が言っていた結節点としての空間に、ただその場や箱があるというだけでなく、その仕組みや人々ですね。ソフトの側として何があったらいいと思われませんか。

あるいは、何があるとそれがさらにキッカケになって、広がると感じられますかね。

●パネリスト(秋田 典子 様)



ちょっと難しいですけども、やはり愛着を持って関わり続ける人という。凄く漠然としていますけども、それに尽きるかなと思っています。

先ほど紹介した、東北の事例でも、ずっと地元の人たちが愛着を持って関わり続けている事が、たくさんの人を惹きつける場になることに繋がっている。

海外の紹介したブルックリンの公園も、公園になる前からずっと市民の方々が、「この場所をどうしようか」と考えずっと関わってきて、その結果として公園になったとか。そのような経緯が非常に重要で、西村先生みたいに地域との魅力を発見する天才というか、そういう方に色々な事を教えていただきながら、その場所をずっとずっと考えて良くしようとした結果として公園やハブになっていくという事が、「その場所が育っていくための非常に重要な条件かな」と思っています。

●コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。同じ質問よろしいですか。なかなか難しいですが。

●パネリスト(宮城 俊作 様)



もし可能であればスクリーン映していただけますか。

これは松戸ではなく、私の郷里の京都の宇治市で少し街づくりをしております。その時に古い民家を改修し、その部分にテナントに入っていただくという。

宇治の街は確かに古い街ですが、同じような人口の減少や高齢化という問題を抱えています。そこで大事だったのは、実は非常に上手くいっているのですが、プロセスを1番最初からオープンにするということです。

どうしたかということ、民家を改修する前の状態でこの場所をマーケットに出したわけです。多くの人から色々な関わりができる意見をもらい、その中には市の職員もいます。地元の商店会もいるし、松戸の話しも先ほど少しでていましたが、小商いをしたいという希望を持っている人たちもいます。

ですから最初に作ってしまい「じゃあ出します」というのではなく、そのプロセス全部を人とのコミュニケーションの中で作り上げていき、時間はかかりますが、地域に上手くハマる可能性を持っている。

私は、しっかり公開してオープンにフラットに色々な方々が付き合える空間環境をできれば市民側から発信し、行政もそれをサポートするという形や環境を作り出すというのはすごく大事ではないかと思っています。

●コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。

プロセスから情報等を開示してオープンにしていき、そこに色々な方々が関わっていきけるような仕組みのあり方が非常に大事ではないかと。そのようなご指摘であったかと思います。西村先生いかがでしょうか。

●パネリスト(西村 幸夫 様)



ソフトでいうと、去年、松戸の都心をテーマにコンペをやりました。都市づくりパブリックセンターが主催し、街の活性化都市デザイン協議というのがあります。去年が20回目の開催でした。そのときの一等賞の画像はありますでしょうか。

街づくりでコンペというのは、他にあまりなく、街づくりという街全体をつくり変える機会は先ずないわけで、ある意味アイデアコンペとなります。この街をどうしていったら良いのかということをやっています。

私は初回から関わっており、途中から審査委員長に就任しています。

去年松戸で開催しまして、37のエントリーがありました。37というのは6年ぶりの多さで、その前に37件という多さがあったのは、新潟の萬代橋周辺です。そこでしたら多くの人がやってみたいと思うのですが、それと同じ位の数がありました。

テーマは2つあり、1つは松戸駅周辺。川から相模台まで全体のビジョンを描くということ、もう1つは中央公園を改修し、市役所といくつかの公共施設等を改良するというものでした。これが1等賞ですが、お分かりになりますか。

ここが中央公園で、そこに市庁舎をハの字型にして、ここから真っ直ぐ来ると階段を上がり建物が迎えるようになっていきます。そしてこちら側は江戸川まで行く。この案の評価が非常に高かったのは、街に色々な軸の可能性があるとしているところです。いくつかの軸がそれぞれの可能性があるということで、街全体の広がりを提案してくれました。

細かいアイデアもたくさんあり、これを松戸と全く関係ない人たちが一所懸命、数週間ものすごいエネルギーを込め、10名ほどのチームで作っています。

去年ですが、受賞者のメンバーを集めてシンポジウムをやりました。受賞者の方々も現場の人に自分たちの思いを聞いてもらうという機会は中々無いため、聞いている側にとっても全くの赤の他人、役所とも関係がない1つのコンペでここまで考え、ここまでエネルギーを使ってくれるとなると、聞いている市民の方々も気持ちがいいと思います。

2等賞もスクリーンに出せそうですでしょうか。こちらは、広場でもう少し色々なものを点在させていき、大きな円環を創ろうとしたわけです。これもすごく面白いアイデアです。私が前半お話しした、今あるものの中で可能性があるのではという話をしましたが、これはそこから1歩踏み出し、そこに新しいものを付け足せばもっと新しい魅力ができるという話です。

これも同じように重要な話です。その時に大事なのはやはりデザインの力なのです。魅力的なデザイン、先ほどのニューヨークのデザインもすごくシンプルに見えますが、使い勝手を考えるとすごく魅力的です。そのようなもので人々が来てくれるような、非常に大きなビジョンの中で、上手くそれを描いていくということより、何年か色々やることにより凄く大きな連環ができ、本当に廻れるようなループができます。それが街の1つの大きな目標だと思えば、「今この部分ができていて、次にこの部分をやればいいのか」と市民の方が思えば、将来のイメージ湧くと思います。

そのようなことが将来に向けて必要だと思います。中央公園、相模台を描き直すということであれ、単に部分を綺麗にするのではなく、街全体にその効果がこのような形で上手く生きていくような、それが結果的に連環していくような物語があれば、単に古い物語に光を当てるわけではなく、そこに新しい魅力を築きあげることができると思います。

●コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。

今までのお三方の話を伺っていると、秋田先生のように地元へ愛着を持って関わり続けたいと思ってくださっている方が居て、西村先生のように専門的な方の立場から「実はこのようなものがあります」ということを情報としてインプットしてくれる方がそこに加わり、そして今のお話のように、一緒になって皆さんの考え

を汲み取りながら、一生懸命考えられるデザイナーがそこに加わっていただく。

単純に言うと、先ずはこのような3者がプレイヤーとして、それを束ねながら全体の話しを進めていくのですが、そのプロセスが宮城先生からありましたように、初めから公開されていて、常に市民と共に歩いていく。情報が開示される中で、それがずっと進んでいく。このようなプロセスが踏めると、様々な方が色々なことに気づきながら主体的に上手く関わるような街づくりができていくのではないかと。

このように今の全体のお話をまとめることができるのではないかと思います。

さてこの後ですが、質問をお受けする時間になってきましたが、最後に一巡だけしたいと思います。先ほど宮城先生からありました、市民が役者になれる所がつまりは市役所であるというお話がシンボリックな言葉としてありました。

市役所そのものや、あるいは行政という言い方で良いかもしれませんが、今申し上げたプレイヤーがいて、透明なプロセスが図られるという形で街づくりを進めた時に、最後に市役所がどのような立ち回りをするべきなのか、せっかく市の方も大勢いらっしゃっていますので、このような場でなければ我々のような立場も、率直な意見を言えない所もありますので、市とどうコラボしたら良いのか、最後にぜひ一言ずつお願いしたいと思います。宮城先生いかがですか。

●パネリスト(宮城 俊作 様)



市役所といいますか、市役所の職員というのは仕事をする上での根拠というものがあると思います。これは制度あったり法律であったり条例であったりすると思います。街づくりに関して言うのであれば、いわゆる制限を加えるものが圧倒的に多いはずで。私はこれから先の街づくりに関しては、「～だから出来ない」という根拠を示すのではなく、どうしたら出来るのかということをも市民と一緒に考えるという。

先ほどの宇治の話ですが、あれは本来であれば非常に厳しいものです。古い建物の改修に関していいますと、大規模改修や修繕となりますと、建築基準法上確認申請を出さなければいけないのですが、古い建物だと構造図もなければ実測図もないという非常に厳しい。ですがその時に、最初からプロセスをオープンにして市役所の人にも関わってもらった結果どのようなことが起こったかという、「こういうやり方だとできないが、このやり方だったら出来る」という、ポジティブに一緒になって考えてくれるわけです。

私はやはりそこをお願いしたい。「出来ない」と言うのは簡単だと思いますが、逆にどうすれば出来るのか一緒に考えていただく、ここがポイントだと思います。

●コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。秋田先生お願いします。

●パネリスト(秋田 典子 様)



これは先ほど例に出した、東北の被災地の特殊事例です。私が感嘆したことは、ここは新しいガーデン、公園みたいに見える所ですが、そのオープニングイベントをやっているところです。

これは市長がゲストで呼ばれています。市民の人たちが主催となっています。

色々大変な所で「これをやりたい、あれをやりたい」と言うと、予算もかかってしまいますが、自分たちでやりたいことを計画にして、市長に先日提出にいきました。その時に、市民の人は市長に対して「花を植えたいので土をください」と要望しました。市民の方は6人いましたが、皆さん土をくださいと言いました。

私は「せっかく市長がいるのに土だけでいいのですか」と聞いたところ、市民の方々はまさに「役者は私たちであり、私たちが8割やるので2割を市がやってくればいい」とおっしゃっていました。それに私は凄くびっくりしました。

それは市役所が手を抜けばいいというわけではなく、市民の方々が8割頑張れるという環境を整えていくということが市役所の役割であり、それが先ほど宮城先生がおっしゃたように「出来ない」というのではなく、出来ることを探していくということだと思います。

それが市民の方たち出来るという自信に繋がり、私たちが8割やるという形に繋がるのではないかと思います。このように愛されて長く続く空間というのはこのようなことなのだと感じました。

●コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。西村先生お願いします。

●パネリスト(西村 幸夫 様)



今の市役所に耐震上問題があって、対策を打たないといけない。その場で建て替えるか、別のところへ行くかということが考えられますが、新拠点ゾーンという可能性が議論されていると思います。

色々な市役所が今までそのような問題を抱えて、色々なことをやってきましたが、大半は何をやっていたかという、現地立替以外だと元々あった場所から遠いところへ行ってしまうのが大半です。

何故かというそれだけの面積がないからです。そうなるともっと市民から遠くなってしまふ。今でさえあまり行かないに、より遠くなってしまふということが起こってしまう。しかし今の流れは、先ほど横張先生の話でもあったように「遠くにある公共施設を集約してコンパクトに効率よく」という時代でもあるので、散らばった公共施設を中心部に集め、

「何かできないか」考えるのが課題となっています。

どこに行くにしても、バスやタクシーを乗らなければならなかったわけですが、ただ松戸の場合は千載一遇のチャンスで、駅から近くに非常に大きな面積の市有地を獲得できること、ここをいかに上手く使うかという中で、やはり市役所の可能性というのはすごく魅力的だと思います。

ただその時に今までの市役所でいいのかというと、「今までも行かなかった市役所をそのような便利なところに作って何になる」と言われてしまう。そうするとせっかく公園なので、公園の中にある公共施設というのは1階部分が非常に重要なので、「ここをもっとパブリックに出来ないか」非常に工夫して今までにない市役所のスタイルを作り、市役所の機能と市民が、先ほどから様々な写真にあるように、もっと使い勝手が良いものにしていくということが上手くマッチングできればウィンウィンだと思います。

それをやれるまたとないチャンスです。都心に市役所を戻すが、土地がないから機能を分散するという市町村もあるわけで、時代は大きく変わっている。この非常に大きなチャンスを、頭の固い市役所ではなく、いかに非常に緑のある公共施設プラス、市民の使えるものとしてどのような提案ができて、どんな魅力的なものが市民と一緒に考えられるのか、今やる非常に重要なタイミングだと思います。

● コーディネーター(横張 真 様)



ありがとうございます。

まさにそのとおりだと思います。今お三方がおっしゃったように、行政の姿勢という意味では、「単にあればダメ、これはダメ、規則だから」というわけではなく、市民と一緒に「どうしたら出来るか」という市役所の姿勢が必要であると思います。

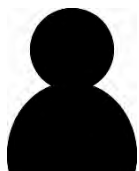
一方市民の側も秋田先生がおっしゃった、市民の方も8割自分が背負うというような意識を持つことで上手くいったという例がありましたが、単にクレーマーで批判だけしてあとは市がなんとかするべきではなく、言う以上は自分が背負うというような意識も市民の方々が持っていただくということであり、そして市と市民が日常的に様々な形でもって、一緒になって市のことを考えていけるような、そういう器としての市役所というのが出来る限りコンパクトに無駄がなく利用しやすい空間に整備される、このようなことがこれから市の行政を進めていく上で、あるいは街づくりを進めていく上で非常に重要な話であると、最後の西村先生の話であったと思います。

すみません。時間をちょっと超過してしまいましたが、ではここからは今日お集まり頂いた皆さま方のご質問をお受けしたいと思います。

大変恐縮ございますが、お時間も限られておりますし、ご意見を今日この場ということですと、我々もどう答えて良いかわからないこともありますので、ご質問という形でお受

けしたいと思うんですけど、さていかがでしょうか。どこからでも結構ですので。
はい。ではお願いします。

●質問者(A氏)



足が悪いので座ったままでお願いします。松戸と池袋、ブルックリンは違いますので、あそこに草原のような公園をつくってもそれがずっと維持されるかというと、ちょっと事情が違うという感じがします。

西村先生のお話しは、すごく松戸の事をよくご存じて、愛してらっしゃるといった感じがしましてとても共感いたしました。松戸市民にとって足りないもの、不足しているものがたくさんあることを講演者の皆さまはご存じでしょうか。

●横張 真 様



はい。わかりました。

それではそれぞれみなさんに、足りないものとしてどういうものがあるか一言ずつで結構でございます。それとあと、南池袋公園と違うのではないかと
うご指摘もございましたので。

●宮城 俊作 様



足りないものは、まさに今お話しした、ああいった大きな、オープンな空間だと思えます。市街地の中に。そのことについては、私は自信を持って言えます。

●横張 真 様



秋田先生いかがですか。

●秋田 典子 様



ちょっと考えさせてください。

● 横張 真 様



はい。西村先生何かございますか。

● 西村 俊作 様



試験されている訳では無いので。

都市は色々な所が足りないと思うので、足りないものがあるのであれば、私は色々な形で吸い上げていただいて、検討会もできているので、そこでやっていただければいいと思いますね。

私自身は、ものすごく松戸のことに詳しいわけではないので、ここで細かいことは答えられないですけど、きっと皆さま方は思っちゃることもあるので、それが上手く「これが足りない、これを議論してくれ」という、そうした仕組みが上手くできることが、足りないことだと思います。

● 横張 真 様



まさにそういう場をつくっていきたいと思いますね。ではどうぞ。

● 質問者(B氏)



今お伺いして、どうしても1つだけお願いしたいのは、その中に美術館をぜひ造っていただきたいです。というのは、松戸市出身の板倉鼎さん、須美子さんという素晴らしい画家、パリで活躍なさった方がいらっしゃる。

それで素晴らしい作品が残されている。そういうものを展示する場がない。つい先日も聖徳さんをお借りして展示して見せていただきました。この際、新しいまちづくりの中にぜひ美術館を造っていただきたいと、強く希望いたします。

● 横張 真 様



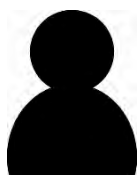
ありがとうございます。私、さっき冒頭の講演の中にデンマークの美術館の例を申しましたけども、私を知る限り世界で一番好きな美術館です。何が好きかと言いますと、現代美術の美術なので普通だったら、すごく難解で、あまり行きたくないような作品が多いような場所が多い中で、あそこは物凄くわかりやすく、しかも子供たちも遊べるように美術館を造っています。しかも「ちょっと疲れた

な」と思って美術館の外に出ますと、非常に広い芝生があってその向こうに海があって、対岸のスウェーデンまでが見渡せる、本当に素晴らしい設えです。

ですから、私も美術館をぜひと思います。それが、先程申しましたように、人々が集ったり、場合によってはお茶を飲んだり、子供が駆け回ったりということと一緒にできるような空間があるべき、と思います。

ありがとうございます。さてお願いします。

● 質問者(C氏)



宮城先生、先程「市民のために役立つところ」という言葉を、松本清市長が作ったのですが、その言葉はどこで教わりましたか。

私の記憶では、私は市の職員で退職して80を過ぎてます。38歳の時、松本清市長から課長の辞令をもらった、そういう仲ですから、あれは「市民の為に役立つ人のいるところ」これがオリジナルだったと思います。それだけです。これは質問じゃありませんが、この話しが繰り返されるのであれば、ニュアンスがちょっと違いますよね。市役所は人の役立つところ。ところが松本清市長はですね、「市民の為に役立つ人のいるところ」、こう書かれました。以上です。

● 横張 真 様



ありがとうございます。「人」ってところが大事だと思います。ですから、私は、「役者」ってところは「人」なんですよ。

● 質問者(C氏)



まあいいですけども。

役立つところって言ったら全国どこでも役立つところ、オリジナルは有用な意味でそう言ったことが正しいと思います。以上です。

● 横張 真 様



はい。すいません。どうもありがとうございます。他に。

●質問者(D氏)



去年市川駅のそばに行きました。

駅に隣接して高層ビルがあり、その中に役所が入ったと聞きましたけども、松戸において駅に隣接して、高層ビルを建てて役所とか公的施設を全部入れて、上にはホテルを入れて、役所跡地は何か違うレジャー施設を造る、こういったことは規制面、技術面、お金の面、そういうので、「そういうのは不可能だよ」そういう話しになるのでしょうか。

●横張 真 様



どなたが答えてもいいですけども。私の私見を申し上げます。

あくまで私の私見ですけど、制度的に不可能では無いです。その可能性はあります。

ただし、「そういう時代では無い」というのが私の認識です。確かにそうした整備をした駅前というのは全国に数多ございます。しかし、そうしたものの多くは、正直申し上げて私の知る限り多くが決して成功していません。

空間的に大きいものをつくり過ぎてしまったが故に、かえって、がらんとしてしまって、さびれた印象を与えることによって、逆に人が全く寄り付かないような空間になってしまっている、そういうケースが非常に多く見受けられます。

ですから、私個人の想いで何か造るということでは全くございませんが、まさに皆さんとの議論で今後考えていくことです。私個人としては、そうしたある意味無駄なお金の使い方をすべきでは無いと思っております。

先程西村先生もおっしゃったように「いかにコンパクトに、そうした構造にしなくたって、それなりの機能が果たせる空間がどうやったらできるか」という所にこそ、知恵を絞るべきではないかと私は思います。

●西村 俊作 様



先程、市川の例をおっしゃいましたけれども、市川の南口にあるのは、窓口のワンフロアだけで、役所は役所で今建て替えています。

市民にとって、窓口での住民登録や「住民票を貰いに行かないといけない」とか、そういう所は近くにあっての方が良い、そうしたサービスの所だけ駅の前にある。

メインの本体は元の所にあるので、そういう意味でいうと、市民の接するところは、駅前にあってもいいと思いますけれども、それはそれほど広くは無い。市川はそういうふうになっています。

●横張 真 様



では、お二階の方。

●質問者(E氏)



鈴木です。今朝、春雨橋から松戸神社まで歩いたのですが、その川岸にアヤメが咲いていました。そのアヤメをとろうと親子が戯れていました。

このドブ川を見たときに「こんな所にアヤメが咲いている」と感じました。

市役所はかつて何年前に、カヌー競技会みたいなものを開き、神社の所から春雨橋あたりまで、子供をカヌーに乗せて遊ばせていましたが、その時の川は綺麗でした。

しかし、今朝見た川はドブ川です。「なぜ1回限りで終わったのかな」と。中には瓶のかけらが落ちていて「子供が足を切ったりして、破傷風にかかったら怖いな」と思いましたが、1回で辞めたのです。

川を綺麗にしようという気にもならないです。江戸川の水を取り入れていますけど、最近では、江戸川の水は再生しておりません。どうして途中で辞めたのですか。

●横張 真 様



はい。これはむしろ市の皆さまに何う事かもしれませんが、どなたかお答えすることは可能でしょうか。

●松戸市(渡辺課長)



松戸市からお答えさせていただきます。

かつて坂川というのは、下水道が普及される前は、非常に汚れた真っ黒い川で、スカムというゴミが、ぷかぷか浮いている川でした。

それが清流ルネッサンス事業ということで、国や松戸市、県と一緒に、市民の皆さまのボランティアの方にもいっぱい協力していただいて、中に落ちている自転車やゴミを撤去し、そうして下水道が普及してきたこともあり、かつての真っ黒だった川から比べると、相当綺麗な川になってきまして、BODなんかはかなり環境基準に近づいてきたわけです。

その一環として、江戸川の河川敷の中に、坂川の水をきれいにする浄化施設をつくって、その水を坂川に戻すという取り組みもして、松戸神社の辺りの水は綺麗な水になり…

●市民(F氏)



まだ汚いよ。何を見てるんだ。

●横張 真 様



お静かに願います。

●松戸市(渡辺課長)



そこでカヌーを使って子供たちへのイベントやそういったことをやってきました。ただですね、最近、「浄化し坂川に流す水の量が若干少ない」とか、そういったことを言われております。「その頃と比べると水が少し濁ってきた」というお言葉をいただいているのも事実でございます。

そうしたことから、今後も、更に坂川の魅力をアップする為に、そういった貴重な意見をいただきましたので、更に環境にも配慮していきたいと考えております。

●横張 真 様



そうですね。実は私もこちらに何う前に少し時間があつたものですから、歩いて参りまして、アヤメが咲いている様子も拝見してきました。

確かに私の印象としても、季節的なこともあるかもしれませんが、梅雨前で少し雨量が少なくてと、若干「水質がどうだろうか、水位もちょっと低いのかな」という印象がございました。

ですから、あの辺がもう少し改善してもらえると、先程西村先生がおっしゃったような、ああした坂川の歴史が持つ意味合いというのが、市民の皆さまにとっても非常に「分かりやすい空間になっていくのではないか」というポテンシャルは確かに感じますね。ぜひ引き続きお願いしたいと思います。では他にいかがでしょうか。

●質問者(G氏)



先程、整備課長からもお話しがありましたが、市民の発意によって、色々と課題だとか、それから問題の解決策だとかそういうものを整理して、それで一つのまちづくりに活かしていく。というやり方を具体的にやっているような事

例がありあましたら教えていただきたいのと、実際にはそういうロードマップやアクションプログラムをやっていく上で、役所の方と一緒にやっていくという組織づくり、そういう具体的な例がありましたら教えていただきたい。

●横張 真 様



はい。ありがとうございます。これも市のほうにお伺いしたいと思いますけれども。先行例はございますかってことですね。

●松戸市(渡辺課長)



これまでは、市民の皆さまと、パブリックコメントやそういった所でご意見をいただくといったことが多かったのですが、今後は、駅近郊の方の意見や若者の意見として、千葉大学さんとか、聖徳大学さんの意見を伺う、また松戸に訪れる人の街頭インタビューだとか、今後はそういったことをしていきたいと思っています。

ただ、これまでのやり方としましては、行政の計画に対してご意見を頂くといった形だったものですから、その辺のやり方を変えていきたいと考えているとこととでございます。

●横張 真 様



はい。ちょっと私の方から、脱線しますが、今日この場に至るまでに、先程市の説明がございましたよね。あれね、私ね4回ぐらい駄目出ししました。

「そういう姿勢じゃ駄目です」と。何度も何度も申しまして、「市民と一緒にやってやるっていうのは違うでしょ」ということを4回ぐらい駄目出しした結果が、今日ですね。

やはりこれからは、これまでのやり方を相当変えていただく中で、この駅前を含めた新しいまちづくりのありかたというものを、進めて行きたいと少なくとも私たちは思っております。よろしければどうぞ。

●質問者(G氏)



先程の続きですが、昨年先生方がやられたまちづくり委員会の時でも出たのですが、「矢切の渡しの所が本当にこれから活性化していくのか」ということに対して、横張先生は「具体的にどうしていくのかという面がよく見えてこないから、この話しを実際に続けていいのか」と、意見があったと覚えています。実際にアクションプログラムができなければ、話し合っても全然意味が無いと僕は思っていますので。

これは「具体的に誰にやらしてもらおうか」とか、「話しをまとめて行くのに、どういう人を参加させるべきか」とか、そういうところが全部抜けていて、今のお話しでも、結局、「松戸駅とか何とかで、周りの来た人の意見を聞いてみる」と言っても、「具体的にどんなやり方をするのか」とか、さっき宮城先生が言われたように年代層によって感じ方が全く違いますしね、そこら辺のアンケートの作り方から考えて行かないと。とても、まとまるまでがもの凄いい時間がかかってしまい、結局その頃には、先程の、コンパクトに色々なものを重ねてやっていく考え方がまた変わってくる可能性もありますから、ちょっとその辺も具体的にやらしてもらえればと思いますが。

●宮城 俊作 様



市庁舎の機能に関して、どのようなかたちが良いのかというのは、なかなか難しいと思いますけど、まちづくり、例えば新しい新拠点と呼ばれる所に入ってくる他の機能に関して言うならば、私は実証実験、あるいは社会実験というのをやっていき、そこに市民の方が参加していかれるという、たしかにロードマップは大事ですが、一方で作り続けるという、そういうプロセスも大事で、形にしますと、明かに状況が白日の下にさらされるんですよ。課題が。

それについて、一緒に考えるといったときに、頭の中でイメージしたものとか、紙に書かれた物ではなくて、実際そこでやってみるといったことも、市民の皆さまが参加していただける非常に良い機会になると思うので、ぜひそちらの方でも意見を言っていただくということかなと思います。

●横張 真 様



はい。どうもありがとうございます。

大変申し訳ありませんが時間が限られておりますので、最後に 1 つお受けして終わりにさせていただければと思いますけれども、どうぞ。

●質問者(H氏)



環境カウンセラーをしている久本と申します。今日大変面白いお話だったと思うのですが、坂川の件もありますので、ぜひ環境的な視点を入れた構想にしてくださいなということを感じた次第です。以上です。

●横張 真 様



はい。ありがとうございます。

今日私たち、登壇した人間のなかにも、普通の大学の業務のなかでは環境に

関わっている者もおりますけども、本日の会、時間が限られていることをごさいますて、そうした点があまり強調できませんでしたが、当然それは考えていきたいことの1つであると私も思っておりますので、引き続きまた色々な形でご支援いただければと思います。

それではすみません。約束の時間 5 分程超過してしまいましたけれども、そろそろお時間もごさいますので、このパネルディスカッションにつきましては以上をもちまして閉めさせていただきますと思います。では、司会進行にお戻ししたいと思います。

よろしくお願いいたします。

●司会

はい。先生方、ご質問いただきました皆さまありがとうございました。

貴重なご意見やご提言をいただきました皆さまに盛大な拍手をお願いいたします。

(拍手)

皆さま、長時間お疲れ様でした。以上をもちまして、ライフスタイル・ワークスタイルの変化と新しいまちづくりシンポジウムを閉会します。

お手元に配布しましたアンケート用紙は、今後、まちづくりを検討するうえで皆さまのご意見を頂戴する重要なアンケートとなりますので、ぜひご協力をお願いいたします。

なお、ご記入いただきましたアンケート用紙は、お帰りの際に回収いたしますので、受付係員にお渡しください。また、お帰りの際にはお忘れ物のないよう、お気をつけください。本日は、ご参加いただきまして、誠にありがとうございました。

閉会